

岐阜県文化財保護センター

研 究 紀 要

第 1 号



2 0 1 5

岐阜県文化財保護センター

目 次

- 五輪塔（火輪）の製作工程の検討・・・・・・・・小野木 学 1
- 扇出土遺跡の性格と扇を使用する祭祀について・・近藤 正枝 18

表紙図版

興福地遺跡（大垣市）の井戸（SE3）の底から出土した扇子の骨

五輪塔（火輪）の製作工程の検討

小野木 学

はじめに

近年における中世石塔の研究成果は著しく、『中世石塔の考古学』や『日本石造物辞典』など、列島規模での論考や資料紹介が掲載された刊行物が出版されている¹⁾。岐阜県では、平成8年に横山住雄氏が県内の中世石塔の銘文を網羅した『岐阜県の石仏石塔』を刊行した。また、近年では、県内の代表的な中世石塔の実測図の提示や、土岐市と瑞浪市における石塔調査報告、海津市における採石場跡の分布調査などがなされている²⁾。筆者も石塔を実見する機会が増えており、平成23年6月に数名の研究者とともに美濃地方の石塔見学会を行った際、不破郡垂井町の岐阜県指定史跡「春王・安王の墓」の南側の無縁墓地にて、石塔未製品の存在に気付いた（写真1）。その後、平成24年3月に、墓地管理者である古山学氏の立ち会いのもと、筆者と竹谷充生氏で調査し、五輪塔の未製品や、宝篋印塔の基礎の二次加工品³⁾などを確認した。



写真1 無縁墓地近景（平成23年6月撮影）

1 春王・安王の墓の概要

春王・安王の墓は岐阜県不破郡垂井町御所野に位置する（図1）。この付近は相川によって形成された河岸段丘上にあり、表層には相川によって運ばれた扇状地堆積物と、主に南宮山塊からもたらされた碎屑物が分布している。南宮山塊の構成は砂岩と頁岩の互層であり、砂岩は粗粒または中粒で、概して砂岩層が頁岩層よりも厚い⁴⁾。

春王・安王の墓の由来は次のとおりである。嘉吉元年（1441）、関東管領足利持氏の子春王（13歳）、安王（11歳）は、結城（ゆうき）城で室町幕府方の上杉氏と戦って敗れ、捕らえられた二人は京都へ送られる途中、足利義教の命により美濃の金蓮寺で斬られた。現在、金蓮寺は垂井町垂井に位置する。本来は垂井町御所野（または春王・安王の墓の南西にある字道場野）にあり、寺伝によれば伝

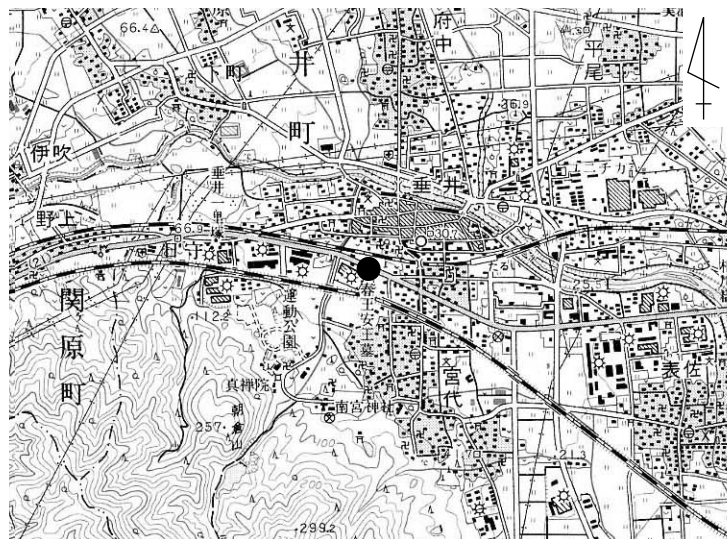


図1 遺跡位置図（国土地理院発行 1：50,000 地形図「大垣」、「長浜」）

教大師の開基にして美濃国一ノ宮南宮神社第一の別当職であったといわれ、それ故に神護山瑠璃光院御所野道場と称し、境内四町四方に堂塔 33 院があったとされている。初めは天台宗であったが、応永 17 年（1410）に時宗に改めた。春王と安王の遺骸は院西の古松の下に葬られたとされている⁵⁾。

古山学氏によると、無縁墓地内の石塔はその周辺にある現代の墓地造成時などに出土した寄せ集めであり、現在、未製品のほかに砂岩製の五輪塔、一石五輪塔、宝篋印塔、石仏、花崗岩製の五輪塔などの各部材が確認できる。小稿では、これらのうち数量の多い火輪の未製品を中心に図化し、その完成までの製作工程等を検討することを目的とする。

2 石工の作業工程等の研究略史と加工痕の分類

(1) 研究略史

石工の作業工程等の復元の研究として、まず和田晴吾氏の研究が挙げられよう⁶⁾。和田氏は 3 世紀後葉から 7 世紀にかけての石工技術の検討に際し、「石工技術の体系を概観し、作業工程と工具、およびその用法について一定の理解を得るため」に、新潟県佐渡相川の例を整理した。そして、「現状では、古墳時代の製作物について民俗例の作業工程をそのまま採用するのは不相当と判断し、具体的には石棺の製作過程を想定しつつ、石材の切りだしを「山取り」、石棺内部を削りぬき、棺の形がほぼできあがるまでの成形段階を「粗作り」、その後の表面調整の段階を「仕上げ」と呼んで区分した。小稿で扱う製作物（五輪塔）の年代は中世後期から近世初頭頃であり、対象とする時代が異なるものの、和田氏が提示した「山取り」、「粗作り」、「仕上げ」は、石工技術の基本的な作業工程と認識できる。なお、中世石塔の素材となる石材は、和田氏の紹介にある山丁場のように岩盤から石を切出すものの他に、谷に露頭する石塊、あるいは押し流されて土中に埋没した石塊⁷⁾（掘丁場）、河川敷の転石採集⁸⁾などがある。そのため、小稿では和田氏のいう「山取り」を「素材の採集」と置き換え、製品完成までの作業工程を「素材の採集」、「粗作り」、「仕上げ」という用語で呼称する。

さて、各作業工程における製作技法について、和田氏は山取りの技法として「a 掘割技法」、「b 自然石の利用」を挙げ、他に「火砕技法」や「矢穴技法」を紹介している。また、粗作りの技法として「a 線引き」、「b ノミ叩き技法」、「c 溝切技法」、「d チョウナ削り技法」、「e 工具としての自然石」を挙げ、仕上げの技法として「a ノミ小叩き技法」、「b チョウナ削り技法」、「c チョウナ叩き技法」、「d みがき技法」を挙げた。近年では兼康保明氏が花崗岩の加工技術として「①打欠き」、「②ハツリ」、「③小叩き仕上げ」の事例を紹介している⁹⁾。

では、次にこれらの研究史を踏まえて、今回図化した資料の加工痕について分類する。

(2) 図化資料の加工痕の分類

今回図化した資料の石材は、いずれも硬質砂岩（もしくはその可能性が高い石材）である。その表面には剥離痕と敲打痕が観察でき、詳細は次のとおりである¹⁰⁾（図 2）。

①剥離痕：石塊の角をはつった痕跡。剥離の大きさと打点の形状から、以下の 3 つに分けた。

a 剥離が大きく、打点が扁平な剥離痕：幅約 0.5 ～ 1.2 cm の打点を有し、剥離痕の幅は約 8 ～ 16 cm である。

b 剥離が小さく、打点が扁平な剥離痕：幅約 0.5 ～ 1.2 cm の打点を有し、剥離痕の幅は約 3 ～ 8 cm である。剥離痕 a・b は、片刃や平ノミなどの直線的な刃先をもつ工具を、石材の縁辺部に直角

もしくはわずかに傾けて当て、頭を槌などで敲く作業の痕跡と考えられる。

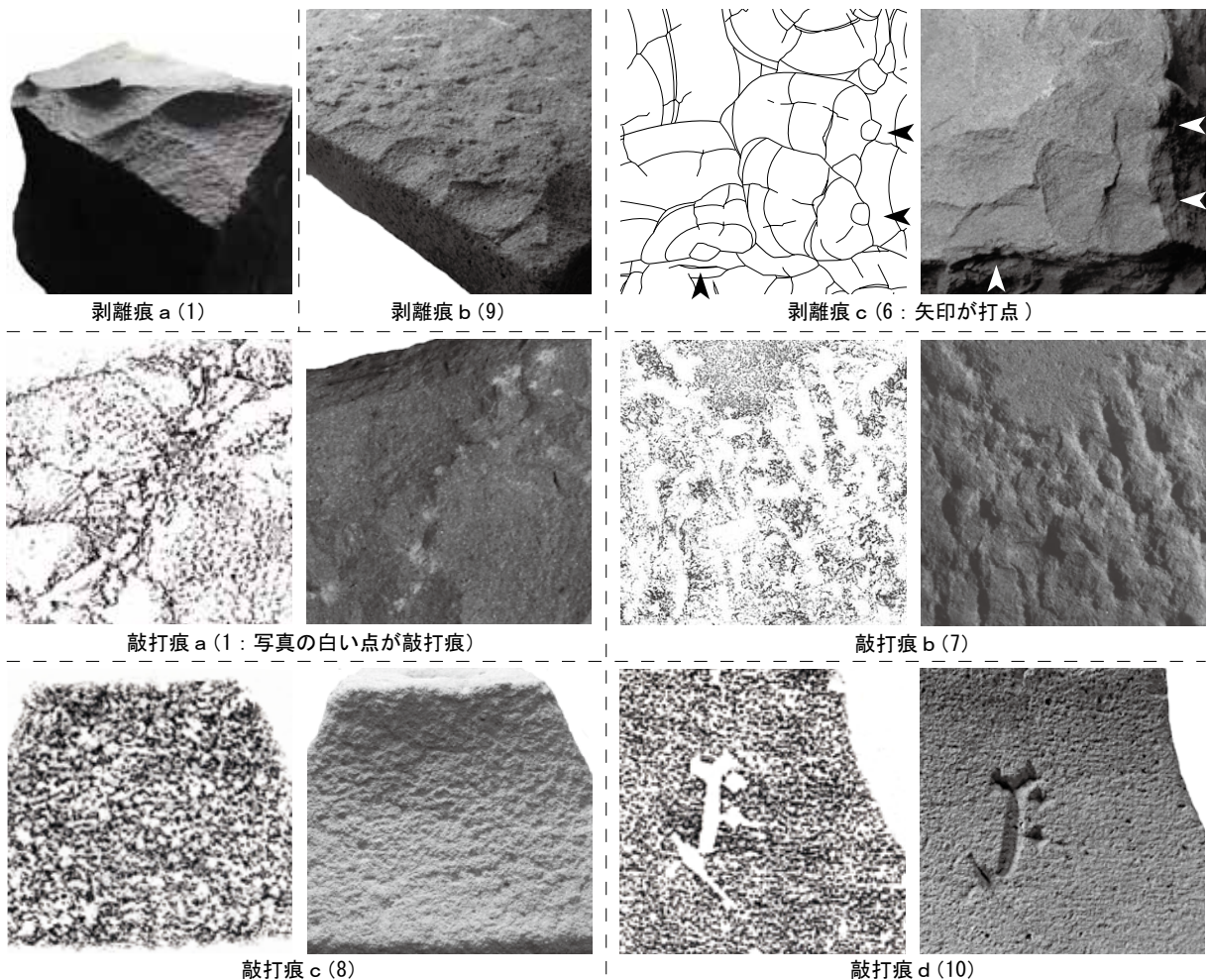
c 打点が丸く窪む剥離痕：幅約 0.5～0.8 cm の打点を有し、剥離痕は幅約 2～5 cm の小さなものが多い。ノミなどを石材の縁辺部に直角もしくはわずかに傾けて当て、頭を槌などで敲く作業の痕跡と考えられる。

②**敲打痕**：石塊の凸部を叩いた痕跡。点状の敲打痕（幅約 3～8 mm の底面が丸みを帯びた窪み）と、線状の敲打痕（幅約 3～5 cm の極めて浅い線状の窪み）が認められ、これらを敲打の密度や広がりから以下の 4 つに分けた。

a 単独の点状の敲打痕：点状の敲打痕が連続せず、単独に認められる痕跡。ノミなどを石材の表面に直角もしくはわずかに傾けて当て、頭を槌などで数回敲く作業の痕跡と考えられる。この敲打痕の多くは剥離の稜線上に打撃されており、敲打による剥落も観察できる¹¹⁾。

b 筋状に連なる点状の敲打痕：点状の敲打痕が筋状に連なる痕跡。幅約 4～8 mm、長さ約 2～8 cm である。ノミなどを石材の表面に鋭角に当て、頭を槌などで押し進めるように連続して敲く作業の痕跡であり、和田氏の分類の「ノミ叩き技法」の一種の「ノミ連打法」による痕跡と考えられる。

c 面的に広がる点状の敲打痕：点状の敲打痕が、面的に広がる痕跡。ノミなどを石材の表面に直



※かっこ内の番号は、掲載番号を示す。

図 2 図化資料の加工痕

(拓本・線画：S=1/3)

角もしくはわずかに傾けて当て、頭を槌などでランダムに連続して敲く作業の痕跡と考えられる。幅約 0.3～0.5 cm の小さな敲打痕と、幅約 0.5～0.8 cm の大きな敲打痕に分かれる。和田氏の分類の「ノミ叩き技法」と「ノミ小叩き技法」による痕跡と考える。

d 面的に広がる線状の敲打痕：線状の敲打痕が、面的に広がる痕跡。両刃などの直線的な刃先をもつ工具を両手で持ち、直接石材の表面を敲く作業の痕跡と考えられる。和田氏の分類の「チョウナ叩き技法」の痕跡に似ているが、佐渡相川の例では「仕上げをさらに良くするためには、刃のある工具である「チョウナ」、「タタキ」、「ナラシ」をこの順にそれぞれ刃の方向を直角に交差させながら敲打して「目つぶし」を行う。」とあり、工具の認定が難しい。

3 図化資料

(1) 資料の詳細

無縁墓地内で確認した未製品は、五輪塔の水輪未製品 3 点、火輪未製品 6 点、用途不明の未製品 5 点、宝篋印塔基礎の二次加工品 1 点などである。このうち、今回は火輪の未製品と製品及びその可能性がある未製品などを 10 点図化した（図 3～9）。

なお、各遺物の記述に際し、空風輪との連結面を上面、水輪との連結面を下面とした。側面は正面、左側面、背面、右側面と呼称し、正面は実測図で正位に配置した面を示す。また、表面（ひょうめん）は石材の肌面を示し、自然面は表面が摩滅し加工面にみられるような粒子の凹凸が確認できない面を示す。以下、順に記載する。

1 は矢穴の残る直方体の石材で、大きさは長さ 22.6 cm、幅 20.4 cm、高さ 14.5 cm、重さは 12.6 kg である。石材は砂岩で、雲母と長さ 2.8 cm 以下の泥岩粒を含む。矢穴は 2 箇所認められ、いずれも自然面から彫り込まれている。その断面形は逆台形を呈し、図面左側の矢穴は、矢穴口長辺 6.8 cm、

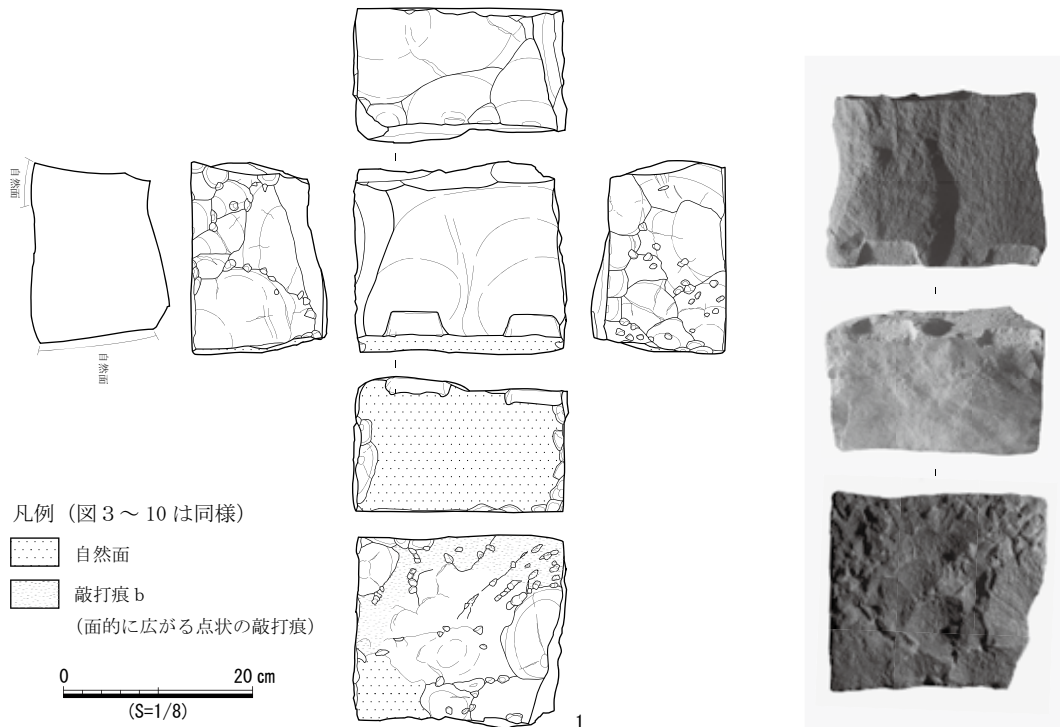


図 3 遺物実測図 (1)

矢穴底長辺 4.8 cm、深さ 2.5 cm、図面右側の矢穴は、矢穴底長辺 4.5 cm、深さ 2.3 cm であり、矢穴の間隔は 6.0 cm である。正面はほぼ全面が自然面であり、下面にもわずかに自然面が残る。左右側面には剥離痕 a の稜線上に敲打痕 a が認められるものの、背面には敲打痕が見られない。下面は剥離痕 a の上に敲打痕 b や敲打痕 c が認められる。なお、矢穴や敲打痕の表面は、それ以外の表面に比べて白く見える。

2 は円礫の側面を剥離した石材で、上面の形状から火輪の未製品の可能性があるものの、幅がやや狭い。大きさは長さ 25.2 cm、幅 21.4 cm、高さ 17.0 cm、重さは 12.2 kg である。石材は砂岩で、雲母を含む。平面形は正面と左側面が直線的でほぼ直角をなすが、背面は彎曲しており、全体的には不整形を呈する。正面と左側面の下半は下面に対してほぼ垂直であるが、右側面は鈍角を呈する。背面と上下面は全面に自然面が残り、上面の凹凸は顕著で、下面は緩やかに湾曲している。正面と左右側面には幅約 8.0 ～ 16.0 cm の剥離痕 a が残り、正面下端には剥離痕 a の上に底面側から打撃された幅 3.0 ～ 4.0 cm の剥離痕 b が認められる。左側面には幅約 16.0 cm の剥離痕 a が残り、正面と右側面の境の稜線上にはわずかに敲打痕 a が確認できる。これが廃棄された一つの理由として、加工の途中で完成形の大きさに達しないことが判明したことなどが推定できる。

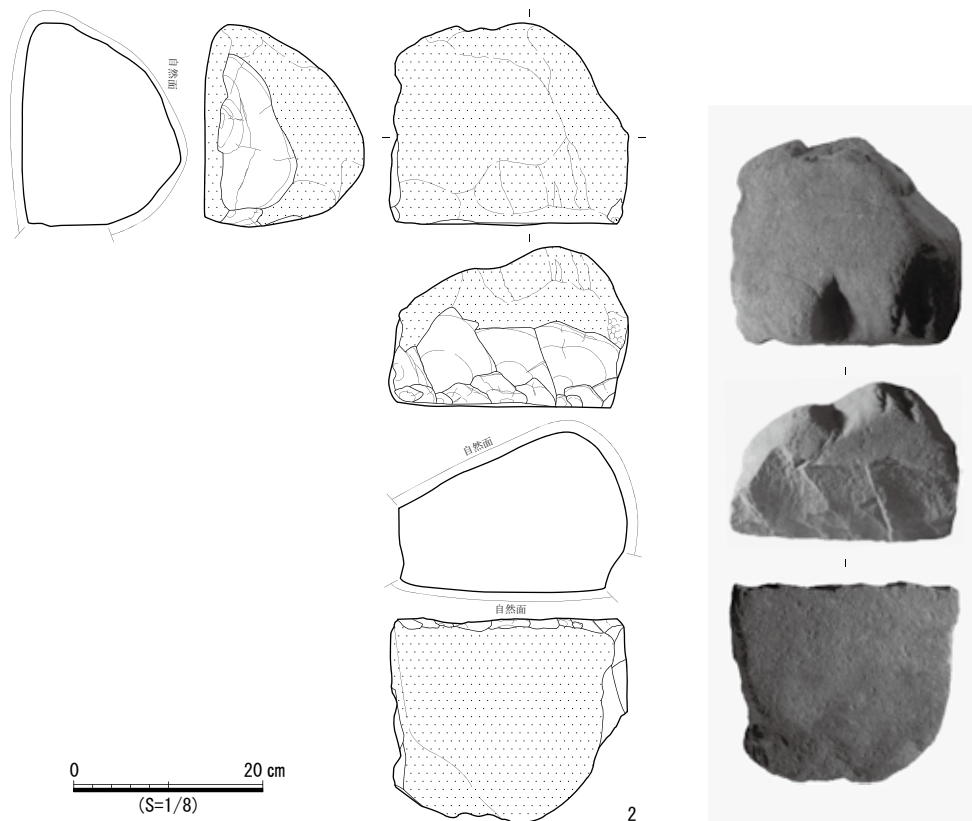


図4 遺物実測図(2)

3 は上面の自然面の傾斜から、火輪の未製品と考えられる。大きさは長さ 30.4 cm、幅 25.6 cm、高さ 16.9 cm、重さは 22.5 kg である。石材は砂岩で、雲母と径 1 ～ 6 mm の泥岩粒を多く含む。他の図化資料と比較して長さとの差が大きく、平面形は正方形というよりも長方形に近い。側面の下半は底面に対してほぼ垂直である。正面と左側面の上半は斜めに傾斜し、摩滅した自然面が残り、正面は被熱している。正面と左側面の下半は剥離痕 a の上に、剥離の稜線に沿って径約 5 ～ 8 mm の敲打痕 a と、

それに伴う幅約2～4 cmの剥落痕が認められる。また、屋根と軒口の境となる稜線が明瞭である。一方、背面と右側面は下面に対してほぼ垂直な平坦面を作出しているものの、屋根と軒口の境となる稜線の作出までは進んでいない。上面は素材の頂部の膨らみを減じるための剥離痕 a が認められ、剥離の稜線に沿って敲打痕 a が残る。下面は平坦で、複数の敲打痕 b と敲打痕 c が認められる。これが廃棄された理由として、背面左下からの打撃により表面が深く剥落し、背面と右側面の境に位置する軒隅部上端の高さが確保できなくなったことが挙げられる。

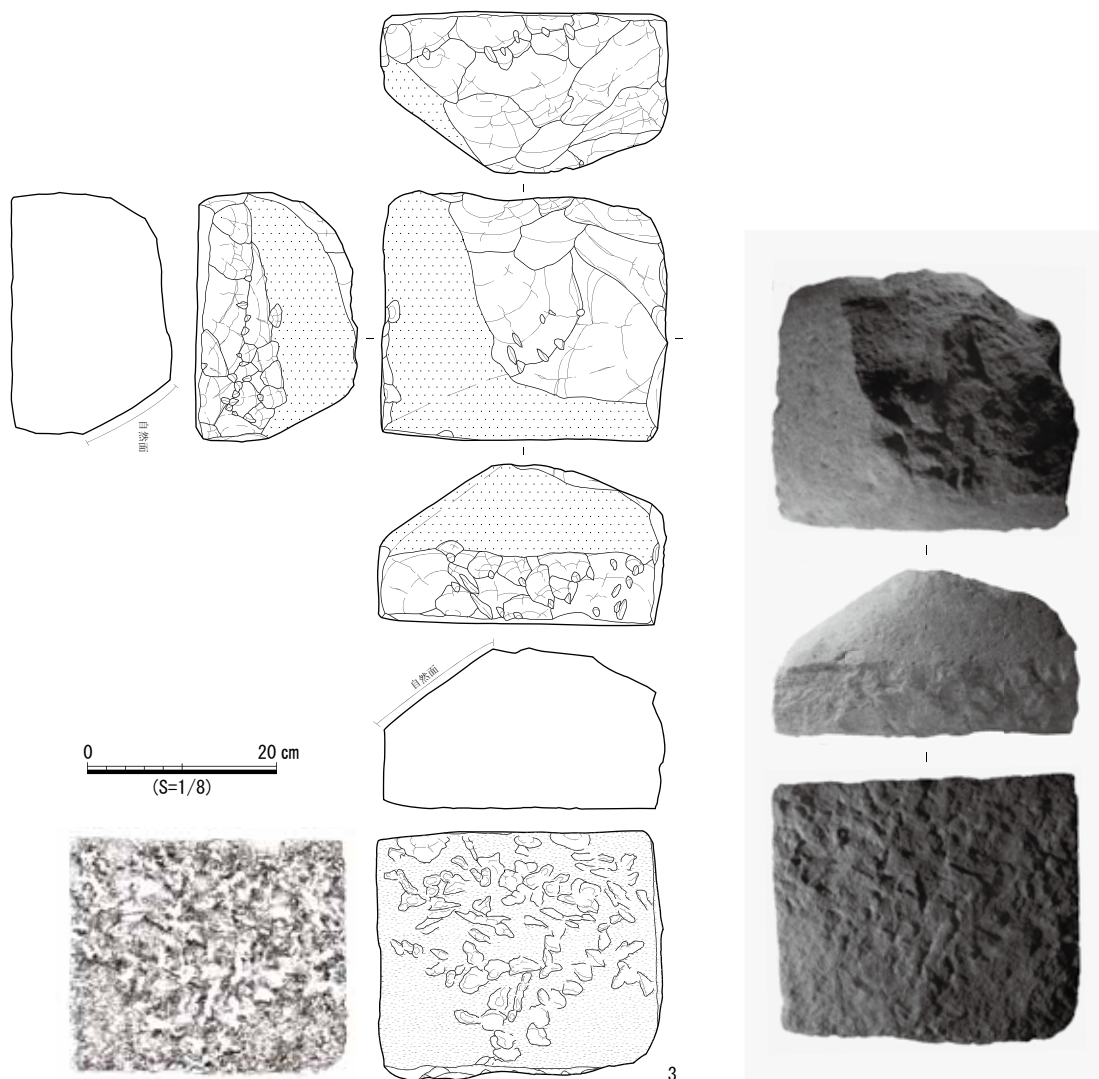


図5 遺物実測図(3)

4は平面形が正方形に近く、正面と背面が斜めに傾斜していることから、火輪の未製品と考えられる。大きさは長さ23.6 cm、幅23.4 cm、高さ15.6 cm、重さは14.0 kgである。石材は砂岩で、雲母と径1～4 mmの泥岩粒を含む。両側面は下面に対して垂直気味であり、正面と背面は下半のみ垂直で、上半は斜めに傾斜している。正面下半には下面から長さ2.5～3.5 cmの敲打痕 b が約1 cm間隔で4条認められる。また、背面と左右側面にも敲打痕 b が認められる。正面上半は斜めに大きく剥離しており、これにより上面の面積が確保できなくなり、廃棄されたと考えられる。なお、背面上方と下面に自然面が残る、下面中央付近に敲打痕 b が残る。

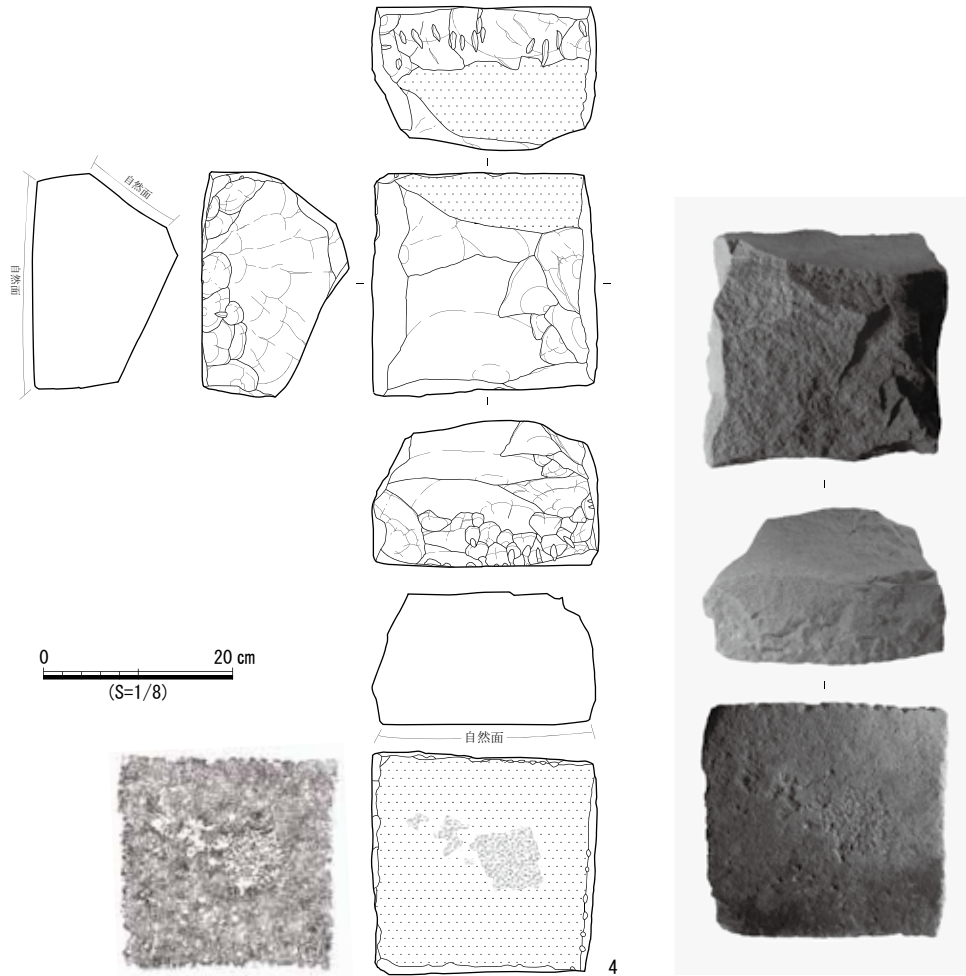


図6 遺物実測図(4)

5は軒口及び軒反りの形状を部分的に作出していることから、火輪の未製品である。大きさは長さ25.5 cm、幅22.6 cm、高さ14.4 cm、重さは13.8 kgである。石材は砂岩で、雲母と径3 mm以下の泥岩粒を含む。平面形は正方形に近い。正面と背面の下半は下面に対して垂直方向に剥離した後に、軒口上辺付近から斜めの敲打を進め、屋根の傾斜と軒反りの形状を作出している。一方、左右側面は軒口が外傾し、屋根勾配を作り出すための斜めの敲打まで及んでいない。正面と背面の軒口上辺から屋根にかけて幅約5～8 mmの敲打痕bが認められ、正面の軒口上辺には底面が丸い幅約5 mmの打点が1.0～2.5 cm間隔で残る。上面には摩滅した自然面が残り、中央部分が最も高い。また、上面から左側面に向かって施された剥離痕cが認められる。下面はほぼ全面が自然面であり、四隅が緩やかに反り上がっていることから、軒裏の反りを意識した素材が選択されたと考えられる。なお、これが廃棄された理由として、正面左上半の敲打により左側面が大きく剥落し、正面と左側面の境となる軒隅部上端の高さが確保できなくなったことが挙げられる。

6は5と同様に、軒口及び軒反りの形状を部分的に作出していることから火輪の未製品である。大きさは長さ21.7 cm、幅21.0 cm、高さ10.8 cm、重さは8.5 kgである。石材は砂岩で、雲母と径7 mm以下の泥岩粒を含む。正面と背面、左右側面の下半は下面に対して垂直であり、下面側から打撃された剥離痕cと敲打痕bが認められる。また、正面と左右側面は軒口上辺付近から敲打により屋根の傾

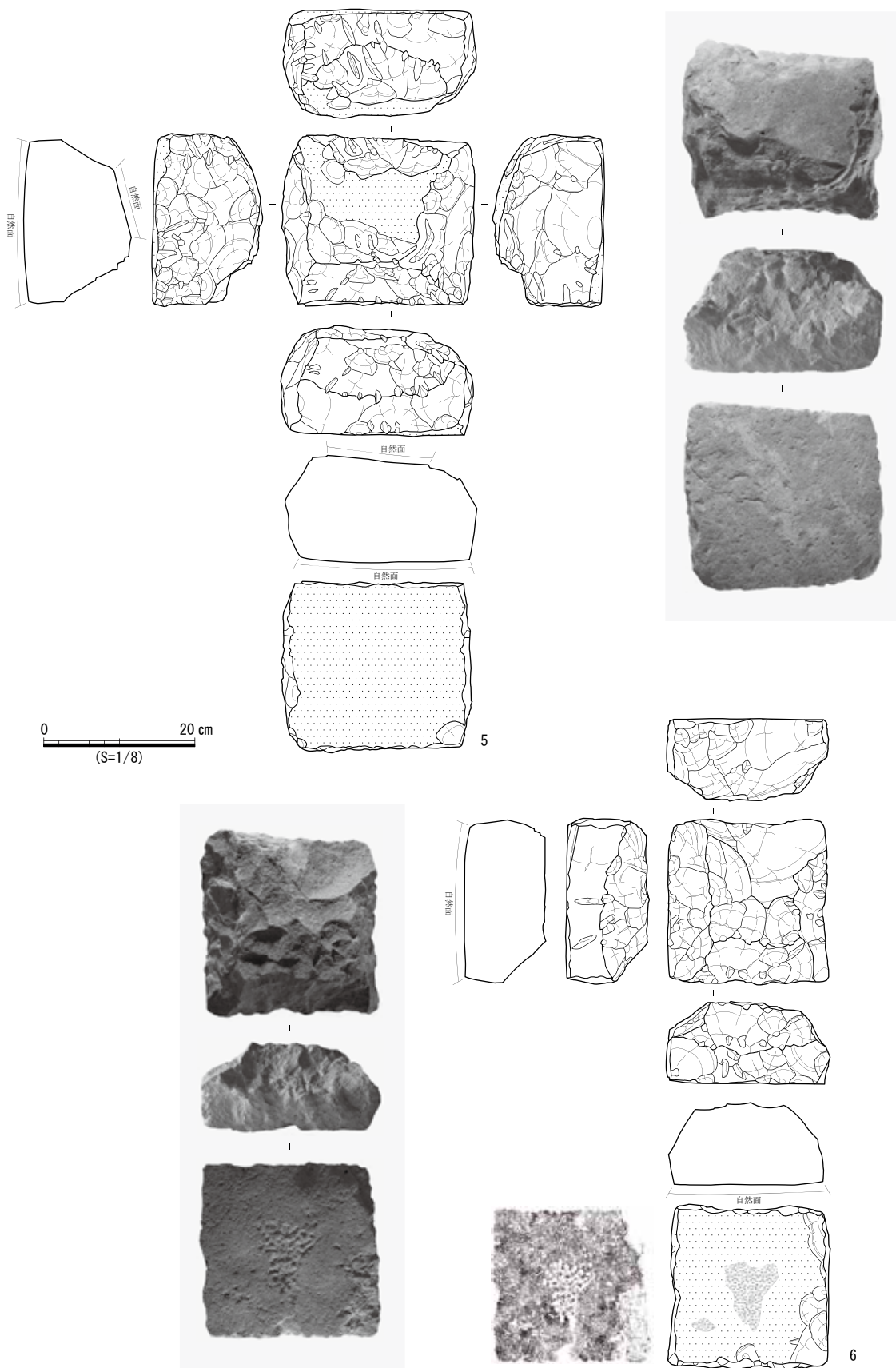
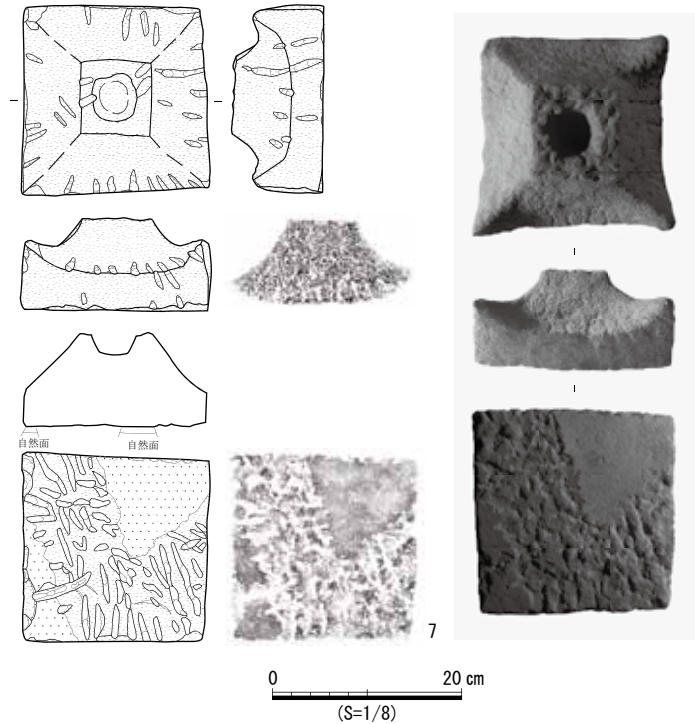


图7 遗物实测图(5)

斜を作出し、正面と左側面には、軒反りの形状が認められる。背面は、軒口上辺付近からの敲打により右側面まで剥落が進み、隅棟部分が欠損したために廃棄されたと考えられる。屋根上辺付近には底面が丸い幅5～7mmの打点が残し、そこから中央に向かって幅約3～4cmの剥離痕cが認められる。下面中央付近には敲打痕bが認められるものの、全体的には自然面が残し、緩やかに湾曲している。

7は火輪の未製品で、大きさは長さ20.0cm、幅19.9cm、高さ10.0cm、重さは6.3kgである。底面は平坦であり、自然面が部分的に残る。石材は砂岩であるが、他のものよりも雲母や泥岩粒が少ない。軒口上辺の反りや隅棟の稜線が認められ、上面には柄穴が穿たれており、火輪の全体形状が完成形に近い状態であるといえる。しかし、9・10と比較すると隅棟の稜線はシャープさに欠け、屋根中央の傾斜が直線的であることから、仕上げの工程まで進んでいない段階の未製品といえる。表面には、ほぼ全面に敲打痕cが認められ、軒口と軒口上辺から屋根上辺に向かってのびる敲打痕bが残る。また、底面には不定方向に施された敲打痕bが認められる。なお、これが製品まで加工されなかった理由として、左側面と背面との境にある軒隅部上端が敲打により欠落したことが挙げられる。



8は火輪の未製品、もしくは完成品で、大きさは長さ20.8cm、幅20.8cm、高さ12.6cm、重さは8.4kgである。石材は砂岩で、雲母と泥岩粒をわずかに含む。下面には自然面と敲打痕b・cが認められ、その周縁には軒裏の反りを出すための幅約3～5cmの剥離痕bが認められる。また、剥離痕bは右側面と背面側（下面に自然面が残る側）は剥離に伴うリングの末端が急角度で上がるものの、左側面と正面側（敲打痕cが残る側）は剥離の稜線が不明瞭で末端が急角度で上がっていない。つまり、下面周縁の剥離後に全体の敲打が施されているといえる。一方、側面

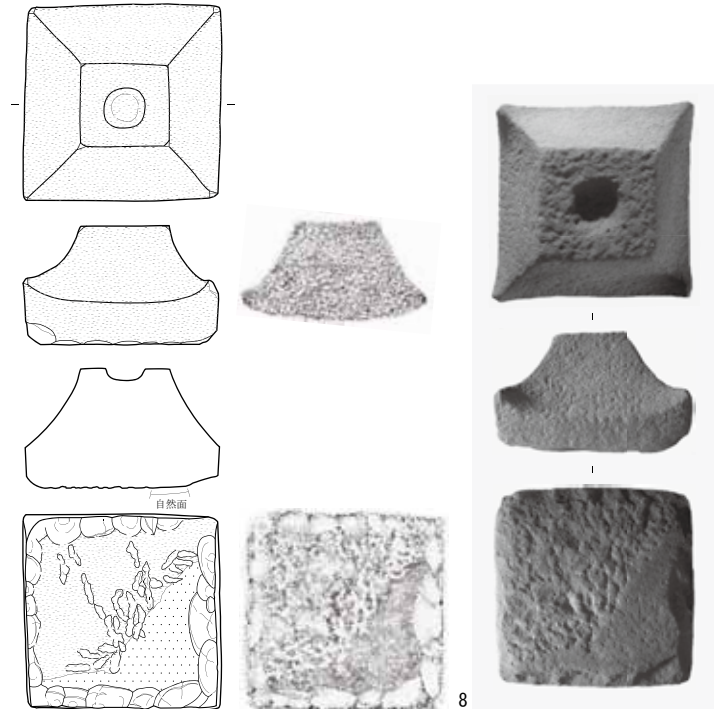


図8 遺物実測図(6)

では軒口上辺の反りや隅棟の稜線が認められ、上面には柄穴が穿たれており、火輪の全体形状が完成形に近い状態であるといえる。表面は、ほぼ全面に敲打痕 c が施され、7 のような敲打痕 b が認められない点で7 よりも作業が進んでいると考えられる。また、9・10 のように表面に敲打痕 d が施されていないという点では未製品といえるが、この状態で完成品と認識されていた可能性もある。

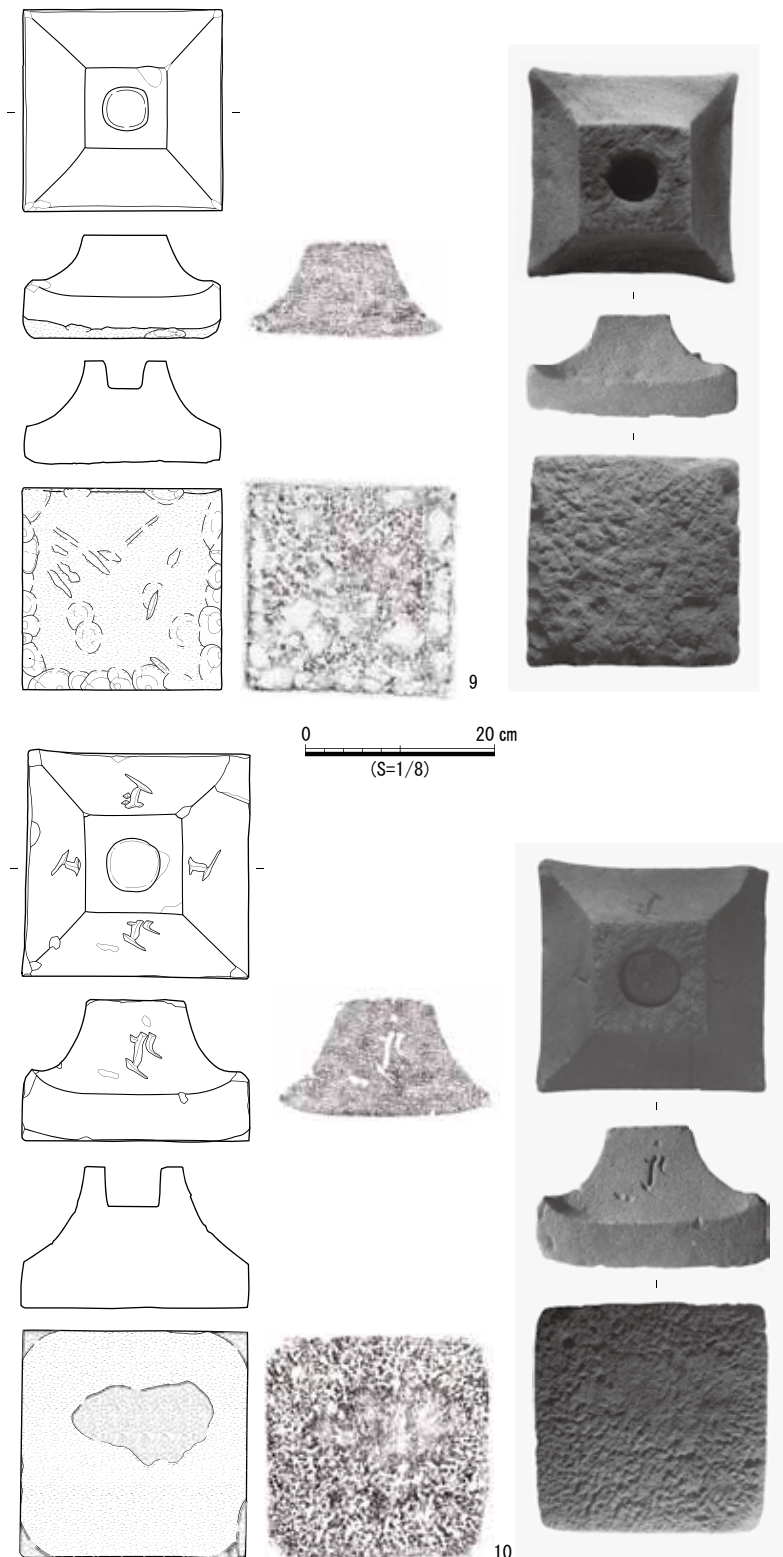


図9 遺物実測図(7)

9 は火輪の完成品で、大きさは長さ 21.3 cm、幅 21.2 cm、高さ 10.9 cm、重さは 7.1 kg である。石材は砂岩もしくは安山岩と考えられ、直径 1～2 mm の空隙が幾つか認められる。表面に自然面は認められない。下面は平坦で、全体的に敲打痕 c が認められ、敲打痕 b が痕跡的に残る。また、下面周縁には剥離痕 b が認められ、8 と同様に剥離の稜線が敲打により潰れている。軒口上辺や隅棟、屋根上辺の稜線は明瞭である。屋根と軒口の表面は平滑であり、採拓すると認められる程度の幅約 2～3 cm の敲打痕 d が水平方向に施されている。なお、上面には敲打痕 c が残る。

10 は火輪の完成品で、大きさは長さ 24.1 cm、幅 24.1 cm、高さ 15.0 cm、重さは 12.9 kg である。表面に自然面は認められない。石材は砂岩もしくは安山岩と考えられ、表面に直径 1 mm 以下の空隙がわずかに認められる。底面は平坦で、四隅がわずかに反り上がり、屋根の側面には梵字が四転する。軒口上辺や隅棟、屋根上辺の稜線は明瞭である。屋根と軒口の表面は平滑であり、採拓すると認められる程度の敲打痕 d が水平方向に面的に施さ

れている。上下面には敲打痕 c がほぼ全面に認められ、上面左側と下面中央付近は摩滅している。

(2) 小結

1～10の資料をまとめると、次のとおりになる。1は矢穴技法により素材を直方体に切り出し、側面と下面に剥離を施したもので、2は素材とした円礫の下半のみに剥離を施したものであり、いずれも素材の平面形を方形気味に整える作業を行っているが、筋状に連なる連続した敲打（敲打痕 b）がほとんど施されていない点で、粗割り¹²⁾段階の未製品と考えられる。なお、1は五輪塔の地輪や宝篋印塔の基礎の未製品等の可能性もある。3・4は軒口部分に敲打痕 b が施される点で、1・2よりも作業が進んでいるといえる。しかし、軒反りの作出までは及んでおらず、屋根は粗割り（剥離痕 a）の状態から作業が進んでいない。5・6は側面の半分以上において軒口及び軒反りの形状を作出しており、上面に水平方向の剥離（剥離痕 c）が施されている点で、3・4よりも作業が進んでいるといえる。7・8は上面と側面全体に点状の敲打（敲打痕 c）が及び、上面に柄穴が穿たれ、火輪の全体形がほぼできあがっている。9・10は完成品で、側面に1～8には認められない線状の敲打痕（敲打痕 d）が残る。

これらのことから、今回図化した資料は、およそ（1・2）→（3・4）→（5・6）→（7・8）→（9・10）という製作工程の順番が想定できる。このうち、（1・2）から（5・6）までと、（7・8）から（9・10）までは、ほぼ連続した工程と考えられるが、（5・6）と（7・8）との資料では形態差が大きく、両者の間には図化した資料では認識できない工程が含まれていると考える。

それを補う資料として、岐阜県養老郡養老町所在の存徳寺にある火輪未製品があり、次に紹介したい。

4 存徳寺の火輪未製品

存徳寺は養老町柏尾に所在し、垂井町の春王・安王の墓から直線距離で南南東に約8.4 kmの場所に位置する。存徳寺の創建年代は不明で、本来天台宗であったが、天文10年（1541）に真宗に改宗して存徳寺と称したとされている¹³⁾。また、存徳寺の北側にほぼ隣接する柏尾廃寺は、基壇跡や大小の平坦面、礎石、墓、土塁、溝、洞穴などの遺構が現在も良好に残っており、寺域内にある多数の石造物を一箇所に集めた千体仏の周辺には石塔未製品を見ることができる¹⁴⁾。存徳寺の火輪未製品は、すでに横山住雄氏が写真で紹介しており¹⁵⁾、近年では竹谷充生氏が柏尾廃寺の石塔未製品と併せて写真で紹介し、その製作工程を検討している¹⁶⁾。今回図化した資料（11）は、竹谷氏が写真で紹介した資料のうち的一点である。

11は長さ20.1 cm、幅19.6 cm、高さ12.5 cm、重さ6.6 kgである。石材は砂岩で、白色粒と雲母が認められ、泥岩粒はほとんど確認できない。表面に自然面は認められず、上下面と各側面の軒口には全面に敲打痕 c が観察でき、左右側面の軒口と下面に敲打痕 b が痕跡的に残る。屋根は正面のみ敲打痕 c が全面に認められ、敲打痕 b が痕跡的に残る。また、図10の拓本や写真をみるとわかるように、正面の屋根の中央部分は敲打痕 c による凹凸が認められるのに対し、隅棟付近は表面が比較的平滑である。一方、その他の側面の屋根は、その周縁から中央に向かって幅3～4 mm、長さ2～3 cmの、底面が丸みを帯びる敲打痕 b が残り、特に左側面と背面の軒口上辺からのびる敲打痕 b はいずれも左上がりの痕跡が顕著である。また、左側面と背面には、軒口上辺から2～3 cm上方に水平方向に彫り

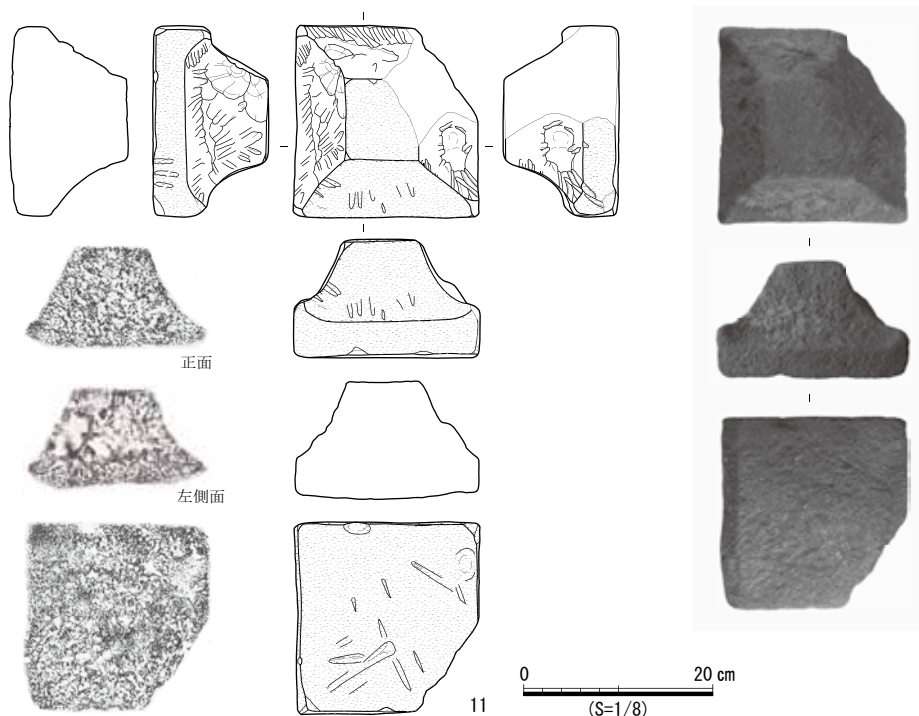


図 10 遺物実測図 (8)

残した凸部が帯状に残り、右側面には中央やや下に幅約 5 cm、高さ約 4 cm の不定形の凸部が残る。屋根の断面形は、正面が曲線を描くのに対し、その他の側面は凹凸が顕著であり、右側面の凸部の頂点は同側面の軒口上辺から屋根上辺を結ぶ直線上に位置することから、この凸部は作業前段階の粗割りの形状がそのまま残って

いる可能性が高い。隅棟は正面の両側の稜線が比較的明瞭であり、隅棟に直交気味に施された加工痕が残る。一方、左側面と背面の境となる隅棟は稜線が不明瞭で凹凸が著しく、隅棟に直交方向に施された加工痕が認められない。なお、これが廃棄された理由として、背面から右側面にかけて認められる大きく剥離が一因として挙げられるものの、剥離が下面からの打撃によるものであり、やや疑問が残る。

11 は上下面と正面及び側面の軒口に敲打痕 c が認められる点で、5・6 よりも作業が進んでいるといえる。しかし、全面に敲打痕 c が及んでいない点や、上面に柄穴が穿たれていない点などから、7・8 の前段階で廃棄されたと考えられる。

5 製作工程の検討

次に火輪完成までの製作工程の検討を行う。今回の図化資料は、無縁墓地内に集積された限定的な資料である。その時期は、県内に残る紀年銘資料などからおよそ中世後期から近世初頭頃と推定できるものの、7 と 10 などは形状から同一時期のものとは考えがたい¹⁷⁾。そのため、以下に述べる製作工程の推定は複数時期の手法が混同している可能性があり、今後、資料の増加に伴い修正すべき点があると思われる。よって、今回は大要を把握するための検討であり、今後の研究の叩き台と理解しておきたい。

今回の図化資料を用いて推定できる火輪の製作工程は、以下のとおりである (図 11)。

素材の採集 製作対象物である火輪の形態に沿った大きさの円礫を採集する。

第 1 段階 片刃や平ノミなどの工具を用いて側面下半を下面に対して垂直方向に粗割り (剥離) し、軒口となる面を作出する。この段階で平面形は方形に近い形状に揃えられる。なお、素材となる自然石が製作対象物よりも数倍大きい場合は、矢穴技法により直方体に分割する。

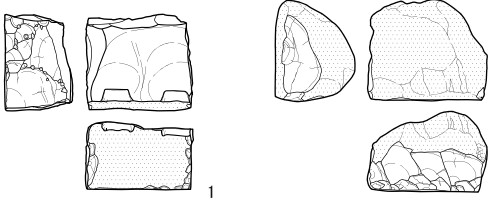
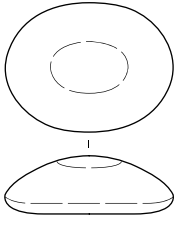
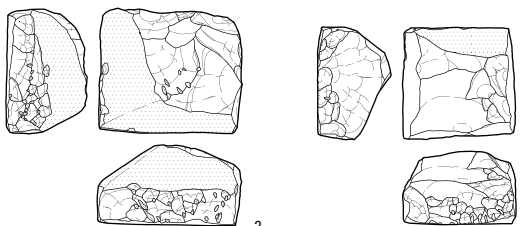
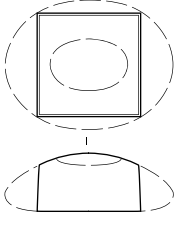
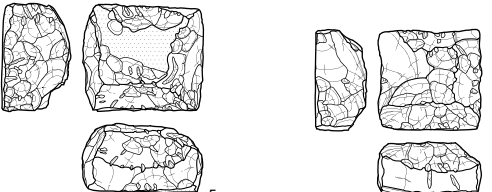
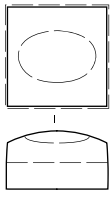
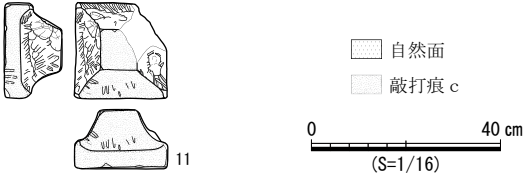
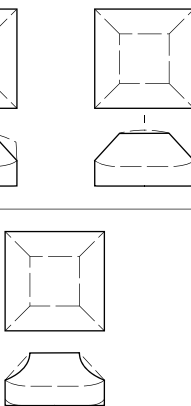

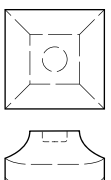
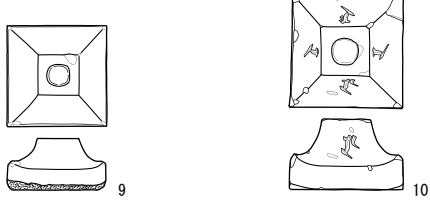
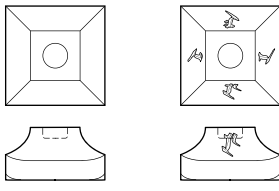
工程	実測図	模式図
素材の採集		
粗作り (前段階)	<p>第1段階 粗割り</p> 	
	<p>第2段階 軒口の成形</p> 	
	<p>第3段階 屋根勾配・空風輪との連結面の成形</p> 	
粗作り (後段階)	<p>第4・5段階 ふち取り、表面の敲打</p> 	
	<p>第6段階 柄穴加工</p> 	
仕上げ	<p>第7・8段階 目つぶし → (研磨) → 完成 梵字彫成 → 完成</p> 	

図 11 火輪の製作工程

第2段階 ノミなどの工具を用いて側面下半を連続して敲打し、軒口となる面の凹凸を減少する。

第3段階 ノミなどの工具を用いて軒口上辺付近から斜めに敲打し、屋根勾配を成形する。さらに、屋根上端付近を水平に剥離し、空風輪との連結面である上面を成形する。今回の図化資料では、屋根から上面までを成形する敲打と剥離を、同一工具で一連の作業として実施している。

第4段階 ノミなどの工具を用いて、軒口上下辺や隅棟付近から敲打し、石材を所定の形に整える。第4・5段階のものは、前段階のものよりも平面形が明らかに方形に整っているため、この段階では、佐渡相川の例にあるように定規とスミツボですみ引きし、凸部をとる「ふち取り」を行ったと考えられる。なお、第4段階の敲打痕bの幅は前段階のものよりも狭いことから、それまでとは異なる工具を使用した可能性がある。

第5段階 ノミなどの工具を用いて側面と上面全体を敲打し、表面の凹凸を整える。この作業により、屋根全体の勾配を緩やかに湾曲させる。

第6段階 ノミなどの工具を用いて、上面中央に柄穴を敲打により穿つ。

第7段階 両刃などの工具を用いて、軒口と屋根の表面を敲打する。この作業により、第5段階の表面の凹凸がほぼなくなり、屋根中央の反りが明確になる。また、今回の図化資料では敲打痕dの痕跡がわずかに認められる程度であったため、敲打の後に砥石などによる研磨があったと想定できる。なお、第8段階を経ない場合は、これで完成である。

第8段階 梵字を彫って、完成する。

今回の図化資料は、1が第1段階終了時に廃棄、もしくは集積¹⁸⁾されたもの、2が第1段階途中で廃棄、もしくは集積されたもの、3・4が第2段階から第3段階へ移行する時点で廃棄されたもの、5・6が第3段階途中で廃棄されたもの、11が第4～5段階途中で廃棄されたもの、7・8が第6段階を終えて廃棄、もしくは集積されたもの（あるいはこれで完成品としたもの）、9が第7段階を経て完成したもの、10が第8段階を経て完成したものである。図11では便宜上、各作業段階内に実測図を置いたが、実際には各段階の移行期において廃棄された資料が多い。

また、上記の段階のうち、第1～6段階は粗作り、第7・8段階は仕上げである。粗作りのうち、第4～6段階は第1～3段階に比べて細かい作業が主体となり、対象物の全体形が完成形に近づいているため、小稿では第1～3段階を粗作り（前段階）、第4～6段階を粗作り（後段階）と区別する。

素材の採集では、火輪の形態に沿った大きさの円礫を探すことともに、下面の形状にも注意したと考えられる。岐阜県内の火輪の下面には、自然面の緩やかな湾曲をそのまま利用した完成品が多く、今回の図化資料でも第6段階の未製品にまで下面に自然面が残っている。そのため、素材の採集に当たり、自然面の一面が火輪の下面として利用しやすいことが選択基準の一つであった可能性があり、逆にいえば下面の加工を可能な限り最小に済ますことができる形状の石材を選択していたといえる。

粗作り（前段階）では、作業場所の検討が重要である。石塔の素材となる自然石は重く、第2段階の工程を経た資料（3）でも重さ22.5kgである。第1段階において図11に示した模式図のような素材形状の石材が粗割りされたと仮定するならば、第1段階で約4～5分の1の重量を軽減できたことになる。素材の採集地の特定は困難であるが、採集地と加工場が離れているのであれば、第1段階の加工を採集地近辺の平坦地を利用して行う方が、運搬を考える上では効率的であるといえる。

粗作り（後段階）では、工人（集団）や地域により、製作工程が前後することがあったと考えられ

る。今回取り上げた第4・5段階の資料(11)は、表面を敲打する第5段階の工程を正面のみ終了しており、他の面は軒口のみを敲打し、屋根中央部分は第3段階の加工が残されたままである。これは、おそらく上下面や軒口などの、作業が容易な平坦な面から敲打を開始しているためであり、作業が困難な湾曲した面を後回しにした結果と考えられる。つまり、必ずしも段階ごとに作業を進めた訳ではなく、状況に応じて作業手順を変更していたことがわかる事例といえる。また、第6段階の柄穴加工についても同様である。群馬県小島田八日町遺跡では、表面の敲打が施される前に柄穴が穿たれた未製品が報告されており¹⁹⁾、今回検討した第5段階と第6段階の工程が逆転している。群馬県と岐阜県とでは距離が離れすぎており比較の対象とならないものの、石工及びその集団単位で作業工程が前後することがあったということを確認できる事例として理解しておきたい。

仕上げの痕跡は、表面の研磨や風化のため現在確認することが難しく、敲打痕dの痕跡を残す石工技術がどの程度普及していたか不明である。しかし、岐阜県内では揖斐郡池田町禅蔵寺、揖斐郡揖斐川町鷹司墓地、岐阜市乙津寺、岐阜市崇福寺、多治見市根本などの各宝篋印塔で、その痕跡を認めることができる²⁰⁾。いずれも硬質砂岩製で南北朝期以降の石塔であることから、その頃には普及していた加工技術であった可能性がある²¹⁾。

なお、水輪との連結面である下面の加工は、第2段階から第6段階までの資料(3・4・6～8)において、敲打痕bまたは敲打痕cが認められるが、第3段階の資料(5)では加工が未実施であり、第6・7段階の資料(8・9)では敲打が施される前に下面周縁を剥離し軒裏の反りを作成している。このように、個体により下面の成形方法が異なっており、製作工程が前後する場合も認められることから、今回の資料だけでは下面の加工をどの段階に位置付けるのか明確にできなかった。

おわりに

美濃地方の中世石塔の石材は、主に硬質砂岩と花崗岩である。このうち、硬質砂岩は養老山系の「青石(あおいし)」もしくは「河戸石(こうずいし)」と呼称される石材が著名であり、名古屋城築城の際にこれらの石材を切り出した記録が残されている²²⁾ことから、これまで山丁場が主体と考えられていた。しかし、今回検討した春王・安王の墓周辺の未製品はいずれも円礫素材であることから、当時は河川敷の転石などを素材とする石塔が相当数存在していたと考えられる。美濃地方において、硬質砂岩の露頭は濃尾平野周縁部の丘陵地や山地帯に確認されており、その南側において砂岩製の中世宝篋印塔が広く分布している²³⁾。これらの素材調達に河川敷の転石利用を含めることが可能ならば、その分布の意味や形状変化の理由等を再検討する余地を見いだすことができる。

また、近年、石丁場や未製品出土遺跡などの発掘調査事例が増え、「粗作り」段階の具体的な製作工程が次第に明らかとなってきた。その一方で、風化等により痕跡が見えなくなっているためか、「仕上げ」に関する論考は比較的少ない。今回の検討では、第1段階から第8段階までの製作工程を推定し、県内の他石塔の表面観察も含めて、仕上げの敲打が南北朝期頃にすでに広く行われていた可能性を指摘できた点も一つの成果と考える。

なお、小稿に用いた資料の実測、トレース、写真撮影はすべて筆者が行った。また、執筆に際し、下記の方々からご教示をいただいた。記して感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

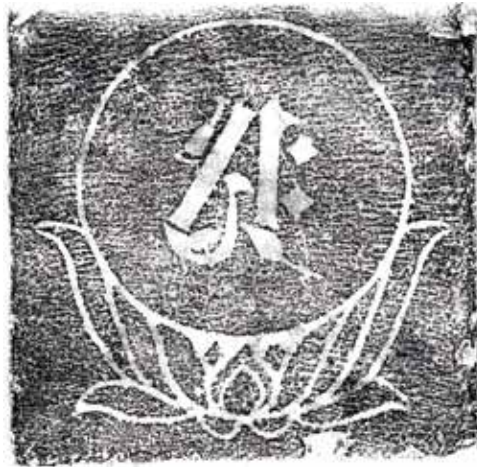
古山学、狭川真一、存徳寺、竹谷充生、中島和哉、長屋幸二、西村大造、原田義久、松井一明

注

- 1) 狭川真一・松井一明編 2012『中世石塔の考古学 五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布』高志書院
日本石造物辞典編集委員会編 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 2) 横山住雄 1996『岐阜県の石仏石塔』濃尾歴史研究所
三宅唯美・小野木学・竹谷充生・砂田晋司・中畷茂 2009「美濃の石塔」『東海地域における中世石塔の出現と展開』石造物研究会
瑞浪市陶磁資料館 2011『瑞浪市歴史資料集』第1集
海津市歴史民俗資料館 2011『海津市歴史民俗資料館 常設展示図録』
- 3) 宝篋印塔の基礎の二次加工品としたものは、輪郭下辺を粗割りした材である。
- 4) 岐阜県企画部土地対策課 1983『岐阜県土地分類基本調査 大垣』
- 5) 垂井町 1969『垂井町史 通史編』
垂井町 1996『新修垂井町史 通史編』
- 6) 和田晴吾 1991「8石工技術」『古墳時代の研究』第5巻 雄山閣
- 7) 兼康保明 2011「中世の花崗岩加工技術－近江・蔵王産花崗岩を例に－」『石造物の研究－仏教文物の諸相－』高志書院
- 8) 佐々木健策 2009「西相模における石塔の加工と変遷」『小田原市郷土文化館研究報告』No. 45
- 9) 注7
- 10) 加工痕の分類に際し、西村大造氏と長屋幸二氏から多くの御教示を得た。また、西村氏には、氏が使用している工具を用いて実際に作業をしていただき、その加工痕の詳細を観察させていただいた。
なお、小稿で記述した工具名は、以下の文献を参考とした。
川勝政太郎 1981『新版 石造美術』誠文堂新光社
渡辺昇 2002「10. 日引石工の道具」『日引』第3号、石造物研究会
- 11) 剥離痕 c の剥離と敲打痕 a に伴う剥落は形状が類似しているものの、剥離痕 c は打点と作業面が異なるもので、敲打痕 a に伴う剥落は打点と作業面が同一面であるものとした。
- 12) 「粗割り」とは、佐渡相川の例の山取り段階の「荒造り」に相当すると考えられる。「荒造り」と「粗作り」が同音で混同しやすいため、「粗割り」という語を用いた。
- 13) 養老町 1978『養老町史 通史編 下巻』
- 14) 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 15) 注2
- 16) 竹谷充生 2012「石塔の製作技法」『中世石塔の考古学 五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布』高志書院
竹谷氏によると、柏尾廃寺と存徳寺の未製品は養老山系の砂岩の切出石を素材とした可能性が指摘されており、未製品にはいずれも自然面が認められないとのことである。円礫を素材とする春王・安王の墓周辺の石塔とは素材の採集方法が異なる点は留意すべきである。
- 17) 1の矢穴が残る石材の時期は、矢穴の大きさや形状から16世紀後半以降であると、松井一明氏から御教示を得た。
- 18) 小稿で用いる「集積」とは、数個の未製品をある段階まで作成し、次の段階へ移行するまで保管しておくことを示す。
- 19) 群馬県教育委員会 1994『小島田八日市遺跡』

20) 禅蔵寺と崇福寺宝篋印塔の拓本を図12に掲載する。

21) 西村大造氏によると、現在、氏が使用している言葉では、第1段階の大きな剥離を施すことを「はいからをかける」、第2段階の筋状に残る点状の敲打を「中切り」、第6段階の面的に広がる点状の敲打を「のみ切り」、あるいは「刃びしゃん(びしゃん)をかける」、第7段階の面的に広がる筋状の敲打を「たた



禅蔵寺宝篋印塔塔身



崇福寺宝篋印塔塔身

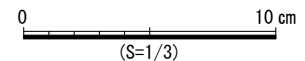


図12 敲打痕dの痕跡が認められる石塔

き」と呼んでおり、例えば10は側面が「たたき仕上げ」、下面が「のみ切り仕上げ」の製品に相当するとのことである。

22) 南濃町 1982『南濃町史 通史編』

23) 拙稿 2012「東海<美濃>一砂岩製宝篋印塔の分布と編年一」『中世石塔の考古学 五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布』高志書院

参考文献

江里口省三 1984「多摩ニュータウン No. 742 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和58年度』(第6分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター

大阪府埋蔵文化財協会 1988『ミノバ石切場跡』

大阪府文化財調査研究センター 1998『楠木石切場跡』

斎藤弘 2009「両毛地域における中世石造物の加工と分布」『中世における石材加工技術～安山岩製石造物の加工と分布～』国立歴史民俗博物館

佐々木健策 2009「円礫加工にみる石材加工技術」『中世における石材加工技術～安山岩製石造物の加工と分布～』国立歴史民俗博物館

下大迫幹洋 2001「8. 奈良県高山石切場遺跡」『日引』第1号、石造物研究会

玉川文化財研究所 2006『山角町遺跡 第IV地点発掘調査報告書』

都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団 2001『御組長屋遺跡第I・II・III・IV地点発掘調査報告書』

森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」『古代学研究』第180号、古代学研究会

扇出土遺跡の性格と扇を使用する祭祀について

近藤 正枝

はじめに

平成 25 年度 (2013) に当センターが発掘調査を実施した興福地遺跡 (大垣市) の井戸 SE3 の底から、扇子の骨 3 本が出土した。井戸の底から出土した細い棒が扇であることに気付いたのは洗浄した直後で、材質、形状が似ているものが 3 本あり同一個体と判断した。当初は檜扇と置いていたところ三重大学名誉教授八賀晋氏から扇子であるのご教示をいただいた。

平成 25 年度の興福地遺跡の調査面積は 583 m²で、井戸以外には掘立柱建物、掘立柱塀、溝を検出し、平成元年に大垣市教育委員会が実施した 1,300 m²の同遺跡の発掘調査では掘立柱建物などを検出している。興福地遺跡は「中河御厨」に比定されており、遺跡範囲は調査地点から北へと広がる微高地上に展開していく。瓦、墨書土器、志摩式製塩土器、ふいご羽口、緑釉陶器が出土しており一般集落ではない様相を示しているが、どのような性格の遺跡なのかは建物遺構の広がりや確認できないとよくわからないという状況である。そこで、「扇」が出土している遺跡を集成すれば、どのような遺跡が広がっているかを想定することができると考え、今回の集成にいたった。

扇出土遺跡集成の方法は、まず、『木器集成図録』近畿古代篇と『木の考古学』のデータベースから扇出土遺跡を抽出し、当センター蔵書の報告書と当センターに無いものは奈良文化財研究所にて報告書を確認した。ここまでの報告書確認の時点で、官衙や屋敷から出土すると想定し、官衙については奈良文化財研究所の古代地方官衙関係遺跡データベースを参考にして、当センター蔵書報告書を確認した。近年刊行の報告書については、当センター蔵書のものを確認した。今回の集成は当センター蔵書を中心に集成しているため、官衙とわかっていても報告書を確認できず集成できていない遺跡もあり、扇出土遺跡すべてを網羅できているわけではないことをご承知おきいただきたい。

また、扇は、檜扇と扇子の両方を集成している。檜扇と扇子の区別は、報告書に記載のとおりに入力している。檜扇としているものの中には幅が細く扇子ではないかと思われるものもあるが、扇と伴に出土している土器の時期から、奈良時代や平安時代の時期のものを檜扇、鎌倉時代以降のものを扇子と判断しているものと考えられる。

檜扇 (桧扇) : ヒノキのうす板でつくった扇。宮城県山王遺跡の例のように樹種がサワラ、スギ、モミ属など、ヒノキではないものもある。奈良時代前半 (平城京出土) から 11 世紀初頭 (徳島県観音寺遺跡出土) の時期の遺物とともに出土している。下端部に比べて上端部の幅が広く、厚さ 0.1cm 前後のうす板を、下端部のみでなく上端部など数カ所で数枚を綴じたもの。中骨は薄い親骨は 0.6cm と厚いものもあるため、基部の破片で出土すると檜扇なのか扇子なのかの判断はほとんどできない。払田柵跡 SL1035 出土の 37 は上端部の幅が狭くなり形状は扇子のようであるが、出土遺物から 9 世紀後半とし檜扇としているものもある。

扇子 : 檜扇から発展したもので、幅の細い骨をもつ紙扇で、現在の扇子が両面に紙を貼るのに対して片面のみに紙を貼る。骨の数は 5 本以上で時代とともに本数が増えていく。上端部と下端部の幅が最大幅に比べて狭くなるか一律に細い。厚さは 0.3cm 前後のものが多い。樹種はヒノキ、スギが多くまれに竹、トウヒなどでつくられている。広げた形が蝙蝠 (こうもり) に似ているので蝙蝠 (か

わほり) 扇ともいう。10 世紀代から 13 世紀末 (新潟県山岸遺跡出土) の遺物とともに出土している。

扇出土遺構について

扇が出土している遺構は、井戸、河、運河、溝、堀、大路の側溝、柱穴、便所遺構である (表 1 ~ 10 参照)。桧扇 1 枚、扇子の骨 1 本だけで出土し齋串として使用していると思われるものが 186 例、要が残り数枚、数本の束で出土し、扇として埋納されたと思われるものが 65 例ある。扇として埋納されたと判断したものは、要が残存している物、出土状況で閉じた状態で出土していると記載のあったものである。扇として埋納されたものが 26%、齋串として使用されたと考えられるものが 74% である。扇として埋納しているもの、齋串として使用しているものの両方ともに、どの時期においてもみられるため時代の違いでも、遺構の違いでもないようである。

興福地遺跡の齋串として使用された扇子の骨は 3 本で、井戸底の西側から出土している。金沢市千木ヤシキダ遺跡 SE2 出土の扇子の骨は 1 本のみの出土で、齋串として使用したのか墨痕があり、「魚」という文字が見える。齋串として使用した扇は、扇の持つ呪力をそのまま生かして地面に挿したのであろう。徳島県黒谷川宮ノ前遺跡の自然流路 SR1002 からは檜扇が 13 枚束になり閉じた状態で出土している。この檜扇の周辺からは人形、齋串、串状木製品が集中する地点が数カ所あるが、扇は集中地点からは約 1 m 離れて単独で出土している。新潟県寺前遺跡では掘立柱建物の東妻の中柱から 3 本束の扇子の骨が漆器皿、箸とともに出土し、地鎮祭祀を行ったと判断されている。また、同遺跡の道状遺構からも 3 本束の扇子が出土している。秋田県弘田柵跡の SX1192 出土 15~17 は檜扇で、外郭北門の北東、材木塀の内側、櫓状建物南西の L 字形溝から出土しており、境界祭祀と考えられる。岩手県柳之御所遺跡 23SK83 は便所遺構であるが、多数のチュウ木とともに、扇子の骨 1 本、鉄鈴、青白磁合子蓋、土師器皿が出土しており、12 世紀後半代に便所遺構を埋めて堀を造る前に祭祀を行ったと考えられる。また、柳之御所遺跡 21SK55, 21SK53 は隣あう土坑で、21SK55 からはチュウ木、扇子の骨 1 本、土師器皿が、21SK33 からはチュウ木と土師器皿が出土し、土坑を埋める前に祭祀を行っている。柳之御所遺跡から扇が出土している井戸は 2 基で、それぞれ時期の異なるこの遺跡の中心となる井戸のようである。柳之御所遺跡の例から考えると、すべての井戸や便所遺構で埋める前の祭祀を行っていたのではなく、代表的な遺構で祭祀を行っていたようである。新潟県浦廻遺跡では投棄された人骨や卒塔婆とともに扇子が出土、清洲城下町遺跡では城下町内部の祭祀空間で人骨や卒塔婆とともに扇子が出土している。浦廻遺跡では人骨が投棄されていることから村落での葬送儀礼と想定されている。

扇を使用した祭祀はどのような祭りであったかであるが、井戸、便所など地面に掘られた穴は、神の住む地下他界への通路であり、神の籠もり場と考えられ¹⁾、また、川の流れ、橋のたもと、堀、路の辻はこの世とあの世との接点で、そのような場所においてはこの世に出現する霊や神を慰めたり鎮めたりするための祭りが行われた²⁾と考えられる。齋串として使用したことから考えると、「くぼみに神木をつきさせば陰陽交合の形になり、これは神のみあれの道をひらくもの (中略) 地面を掘り下げた穴、神の通路と籠もり場を塞がず、「混沌」「太極」「ニライ (常世)」という聖地に変えるという祭祀を行った (中略) 伊勢神宮の諸大祭において太玉串は神として遇されており、齋内親王が太玉串を立てさせられるところは瑞垣御門の西側で、西は東の「陽」に対し、「陰」、「女」の方位だ

から、そこに立てられる棒状のものの本質は「陽」であろうと考えられる。」（吉野 1975）という考えがヒントになりそうである。

上記のことから考えると、井戸、河、運河、溝、大路の側溝はすべて水が関連し、湧水、流水に伴う祭祀を行った遺構から扇が出土すると考えられる。水には穢れを流す力があることから「大祓」の祭祀、束になったまま出土することから、清い湧水に扇を奉納するといった祭祀が考えられる。柱穴出土の例は扇以外の出土遺物から地鎮が想定される。また、井戸、河、運河、溝、大路、便所遺構などが、神々の世界とこの世との接点と考えられていたところであることから、この世に出現する霊や神を慰めたり鎮めたりするための祭りを行っていたと考えられ、さらには、地面を掘り下げた穴、神の通路と籠もり場を塞がず、聖地に変えるという祭りを行ったと考えられないだろうか。

興福地遺跡の井戸から出土した扇子の骨3本は、扇の持つ呪力をそのまま生かして地面に挿した斎串で、神の通路と籠もり場を塞がず、聖地に変えるという祭りを行ったと考えられないだろうか。

扇出土遺跡の傾向

扇出土遺跡で、遺跡の性格が判明している例を上げると、払田柵跡、山王遺跡：国司の館、矢倉口遺跡：国衙、寺家遺跡：気多神社政庁、柳之御所跡：平泉館、山岸遺跡：守護の館である。

扇出土遺跡を全て網羅しているわけではないので、大胆な仮説をたてるとすると、扇が出土する遺跡は、交通の要所（国府の出先機関）、国司の館、国衙、荘園領主の屋敷、守護・地頭の屋敷、と考えられる。「平安時代においては、扇子は朝廷・貴族の遊芸や僧侶・神職の儀式用の使用に限られていた。」（宮脇 2008）ようである。櫛や木簡、形代が多数出土している遺跡においても扇は出土したりしなかったり、むしろ扇は出土数が少なく出土遺跡は限られており、扇を持つことができる人が限られていたということができるようである。扇が出土する遺跡からは奈良三彩、緑釉陶器、銅印、鏡など出土数が少ない逸品が出土していることが多いようである。

宮城県山王遺跡では9世紀前半に河川跡と東西大路で行われた祓の祭祀を諸国大祓と想定している。島根県の史跡出雲国府跡大舎原地区の1・3・4号建物は国司の館の可能性が高いと考えられており（島根県教育委員会 2004）、1号建物の南の4号井戸からは4本束の扇子が出土している。この扇子は井戸枠を覆う土から出土しており、井戸を埋める際の祭りを行っていると考えられる。国司の館を区画する南北方向の4・8号溝からは、「介」の墨書がある須恵器が出土している。「介」は次官級国司の官名である。

国司が行ったと思われる祭りとしては、神社修理や山・川等の自然神への祈願が挙げられる。8世紀段階では、道饗祭、鎮火祭、大祓など、都城で行われていた神祇祭祀が、国衙でも国司の手で臨時に実行されていた。9世紀段階では、臨時祭の名神祭に色々な機能（祈雨、疫病、豊稔祈願等）が付与され多用されたようである³⁾。このことから、国司が扇を使用して、この世に出現する霊や神を慰めたり鎮めたりするための祭り、地面を掘り下げた穴、神の通路と籠もり場を塞がず、聖地に変えるという祭り（道饗祭、鎮火祭、大祓、臨時祭の名神祭、止雨祈願⁴⁾等）を行っていたとも考えられる。

石川県寺家遺跡、静岡県伊場遺跡は国府ではないが、両遺跡に共通している点は、海に面した内湾近くにあり、交通の要所にあるという点にある。以下に、国府とは性格の異なる遺跡からの扇出土例と、扇が出土した遺跡の性格について記述する。

伊場遺跡は全国で最も多く木簡が出土し、「百怪呪符」「急々如律令」と記した呪符木簡が出土しており、畿外においても広い範囲に律令的祭祀が広まっていたことが知られる（森 2013）。伊場遺跡は7世紀後半に渚評（ふちのこおり）の役所がおかれ、8世紀から10世紀にはその後身の遠江国敷智郡の郡家（郡役所）であったと考えられており、持統天皇三年の放生会木簡が出土している。伊場遺跡からは木簡 108 点、墨書土器 400 点が出土し、唐三彩陶枕等の逸品が出土している。遠江国の国府は磐田市に比定されており、その国府に近い位置に伊場遺跡は位置している。持統天皇三年の放生会は持統天皇ゆかりの王領に限られたものと考えられており、渚評が王領支配の「実験農場」で、遠江国が律令制地方政治の模範国と位置づけられていたと考えられている。10世紀代になると国府は構造上大きく変化したり移転したりし、それまで存続してきた郡家は廃絶する傾向が認められる。そして、在地の実質的支配は郡家を拠点としたものから国府を中心とした方式へ、また、国庁から国司館を中心とする行政へと大きく転換していく。それとともに、8世紀以降に生まれてきた都市的萌芽も、独自の経済基盤を持たず、その地域に根付いたものでなかったために、10世紀ごろに断絶または転換期を迎えており、従来の形のままで中世都市への発展をたどることはなかったと考えられている。

寺家遺跡では扇は遺跡北の溝からの出土である。この遺跡からは赤彩のある墨書土器、鏡、銅鈴などの祭祀遺物、火を使った祭祀遺構等、祭祀に関係するものが多く検出されている。気多神社政庁から気多神宮寺へ、神祇信仰から神仏習合への足跡が辿れる。古代律令国家から権門勢家が権力を握った古典的貴族国家に変質する時代と重なって、気多神社自信も神祇制度末端の律令的官社としての性格から、位田や神封等の領民を抱えて在地領主化の道を辿り始める歴史的な変換点が、寺家遺跡の変容の背景にある。律令的祭祀の終焉と、中世的な神仏習合が始まる時代である⁵⁾と考えられている。

山形県米沢市古志田東遺跡からは運河から扇が出土している。この遺跡は9世紀中葉前後に成立し、10世紀代に入ると機能を失った在地豪族の屋敷跡と考えられているが、大浦B遺跡の郡衙が9世紀前半に移転しようとしていた時期に、官衙をはるかに凌ぐ豪族屋敷の建設が行われていたと考えられている。屋敷周辺では、水田の開墾と併行して運河を整備、管理し交易を行うとともに、屋敷の一端には工人を集めて木製品等を工房内で作らせている。呪術絵等の墨書土器や木簡から、広域な交流や文書業務、祭祀等を恒久的に実施していたと考えられている。9世紀後半から10世紀初頭の社会情勢は、律令国家が衰退する中で地方豪族や有力者が台頭し、自らの支配基盤を拡大する過度期にあっており、古志田東遺跡はまさに、この時代を象徴するもの（米沢市教育委員会 2001）と考えられている。

新潟県田伏山崎遺跡では、自然流路の蛇行部から扇子の骨が1本と頸部を打ち欠いた墨書のある壺、八稜鏡とともに出土している。鏡は古代の国府から多く出土すると判断されている。また、同遺跡からは6世紀後半の土師器の内面を黒色処理したものが出土し、水に関する祭祀が連綿と受け継がれていく様子がうかがえる。

新潟県山岸遺跡では東・東南・南方向から湧水する地に、古墳時代後期には黒色土器が出土しており、おそらく古墳時代後期から水に関する祭祀が始まり、12～14世紀には湧水域に庭園遺構を伴う大型建物が建てられ、扇を多く使用する祭祀が行われている。

上記のように、水に関する祭祀は古墳時代から室町時代まで湧水域において連綿と行われ続けていく傾向が見られる。扇祭祀を行った扇の所有者が、貴族以外では、国司、保司、荘園領主、守護・地頭と変わっていくことは、有力者が時代とともに変わっていくこととリンクしているようである。興

福地遺跡周辺は伊勢神宮領「中河御厨」に比定されていること、「興福寺」に関連する可能性から推定すると荘園領主クラスが関連していると考えられないだろうか。扇を使用した祭りを地域の有力者が行っていたとしたら、それはどういったものであつたらうか。次に想定できる祭祀をあげてみた。

扇を使用する祭祀とは一白と黒のセットをヒントにしてー

「扇」は『延喜式』の祭料（幣帛）リスト（西宮 2004）にはあがってこないが、神仏に納めた例がある。松江市佐多神社に納められた檜扇（吉野 1970）や、京都東寺の千手観音像腕に納められた檜扇（宮脇 2008）、厳島神社の五骨の蝙蝠扇は高倉天皇の御寄進という社伝をもち、経塚の経筒に扇子が納められた例があり、嵯峨の清涼寺に伝わる地藏像の胎内には細骨七骨の蝙蝠扇が納入されている。現在でも伊勢神宮の御田植祭では大扇を、熊野神社の扇祭にも大扇を使用している（中村 1983）。

扇には呪力があり⁶⁾、「祓い」に使われたと考えられる。報告書を見ながら扇を集成していて気付いたことであるが、木製品、特に形代が多く出土する遺構には必ずといっていいほど櫛⁷⁾が出土している。櫛は多く出土するのに扇はほとんど出てこないという印象を受けた。扇は数が限られているということであろう。扇も櫛も男性の象徴を表し、「水」、「女」を意味するところに捧げられるのである。

興福地遺跡 SE3 のそばの SK10 からは完形の山茶碗が2点口縁部を上にして出土している（図1参照）。2つの内の一つは内外面に故意に煤を付着させており、白と黒のセットになっている。白と黒で思い浮かぶのは陰と陽であったが、吉野裕子氏によると、陰と陽は色であらわすと「黒」と「赤」であった（吉野 1974）。陰が黒で、陽が赤である。黒と赤は縄文時代から祭祀に関するものに使用されてきた色である。今回の集成で扇に伴って出土した彩色のある土器は赤彩土器と黒色土器がある。黒色土器には、徳島県黒谷川宮ノ前遺跡出土のものなど土師器の内外面にヘラミガキをほどこしたものと、高槻市嶋上郡衙跡、新潟県一之口遺跡や興福地遺跡のように土師器や山茶碗の内外面に故意に煤を付着させたものがある。

島根県出雲市三田谷 I 遺跡では、湧水坑と、湧水が流れでる溝 SD06 から内外面に赤彩を施した土師器が出土し、奈良時代のものに多く赤彩がみられる（島根県教育委員会 2000）。富山県高岡市中保 B 遺跡の7世紀中頃から9世紀中頃の遺物が出土する豪族層居宅近くの水路 SD01 からは、赤彩土器と内面黒色土器が出土している。中保 B 遺跡の赤彩土器は8世紀から9世紀代のものが主体で、内面黒色土器は概ね9世紀代以降のものも多く出土する傾向にある。同遺構からは暗文土器も出土している（高岡市教育委員会 2002）。徳島県観音寺遺跡の自然流路 SR3001 からは8世紀後半から9世紀前半の層から内外面赤彩土師器が、9世紀から10世紀の層から黒色土器が出土している。黒谷川宮ノ前遺跡の自然流路 SR1001 の9～11世紀の層からは赤彩土師器と黒色土器が出土している。赤と黒の両方の彩色の土器が出土している例は少ないが、中保遺跡の例から考えると、水に関する祭祀で赤色を使用するのは9世紀代以前に多く、黒色を使用するのは9世紀代以降に多いのかもしれない。

興福地遺跡の扇が出土した SE3 からは、煤を故意に付着させた山茶碗が、祭祀に使用された土器として出土している。同じようにいぶされた黒色土器が出土しているのは嶋上郡衙跡などがある。故意に黒色にした土器は祭祀に使用されていることが多く報告されているが、黒色土器のみが祭祀に使用されたのではなく、黒色の土器とそうでない土器、白と黒のセットで、二色の調和から自然の秩序が

保たれることを願う祭祀を行っている可能性が考えられる。嶋上郡衙跡では、墨書のある合わせ口の土師器皿が出土した井戸から、黒色土器が出土しているが、「黒色土器Bの手法・形態を有しながら、いぶされていないと思われる灰褐色系統の土器片が14点検出されており注意をひく。」(高槻市教育委員会 1981)とある。このように、同じ遺構から黒色のものとそうではないものがセットで出土している例が、市川橋遺跡や山王遺跡の河川跡や井戸から、山形県大坪遺跡の井戸から、秋田県厨川谷地遺跡の湧水点の祭祀場などから出土している。厨川谷地遺跡の祭祀場からは墨書土器、黒色土器、打ち欠きのある土器、桃の種、ヒョウタンが出土し、これらは湧水の祭祀に使用された道具で、同様のものが興福地遺跡 SE3 からも出土している。今回はヘラミガキのある黒色土器と、いぶされて黒くなった黒色土器を区別して一覧表には入力していない。報告書に記載されている内容で記入している。

遺跡の発掘調査で検出された水辺の祭祀でみえる色は「赤」、「黒」、「白と黒」である。「赤」は「水」の「陰」に対して「火」、「陽」の赤を祀ったと考えられる。「黒」は「水」に対して水そのものの黒を祀ったものと考えられる。「白と黒」は「太一」と「天」に祀ったものと考えられる⁸⁾。「赤」と「黒」は奈良時代に多く、「白と黒」は平安時代後半から鎌倉時代に多いように思われる。

「赤と黒→火と水→陽と陰→陰陽統合体→太極(太一)」(吉野 1999)から考えると、「赤」、「白と黒」は、「1 国家の安寧と秩序、2 自然の順当な循環、およびそれによってもたらされる年穀の実りを祈るもの」(吉野 1984)であると考えられる。

平安京右京三条一坊六・七町跡—西三条第(百花亭)跡—からは「太一」の墨書土器が出土している。この墨書は灰釉陶器底部中央に墨書されており、池 250 第 2 層から出土している。池 250 からは扇も出土している。このことは、扇を使用する祭祀を行っていた時期に、「太一」の思想が存在していたことを示しているといえよう。

井戸の「まなこ」出土遺跡について

興福地遺跡において、扇子の骨が出土した井戸の上層からは、埋井の祭祀で使用した道具がまとめて投棄された状況で出土している(図 2 参照)。平安時代末から鎌倉時代初頭の山茶碗と、青磁、白磁、ロクロ土師器、土師器皿、斎串、板状木製品、下駄、手押木、笊などが出土している。山茶碗はほぼ完形の碗が 23 点、小碗が 2 点、皿が 6 点、小型片口壺が 1 点出土し、これらのうち口縁部を故意に打ち欠いているものが 10 点、内外面に故意に煤を付着させているもの 9 点、墨書のあるものが 5 点ある。また、「小型片口壺は美濃須衛産の特注品で、口縁部を故意に打ち欠いていることから、神が使用するために準備されたと考え、井戸の「まなこ」と考えられる」と帝塚山大学教授宇野隆夫氏からご教示いただいた(図 3 参照)。奈良県橿原遺跡の発掘調査で井戸が多く検出され、「居合わせた見物人の一人は「まなこ」が出たからこの井戸の底だと云っていたので、少し追究をしてみる。伊勢の人であって、その地方には井戸の底に「まなこ」と云って、桶・壺・竹で編んだ笊状のものを入れると云う。それは早魃になればそれに従って掘り下げるためだとも云う。そして井戸を埋めるときには必ず「まなこ」を取り上げなければ祟ると云う。」(奈良県教育委員会 1961)と記載している。

上記の民俗例から考えると「まなこ」は井戸の神様の住まい、抛り所と考えられる。「まなこ」という言葉はどのような漢字をあてるのかは不明であるが、古語ではないかと思われる。注に記載した内容から想定すると井戸の神は女性で、その神の住まい「まなこ」に、もし漢字をあてるとしたら「真

魚壺」といったところであろうか⁹⁾。

井戸の「まなこ」出土遺跡の集成を、扇出土遺跡の集成と同時に進めてきた。奈良県橿原遺跡の例のように、井戸底に曲物が据えられる「まなこ」の例もあるが、今回の集成は、興福地遺跡で口縁部を故意に打ち欠いた小型片口壺が出土している様子に近い例を集成しようと、井戸から完形に近い壺が出土した例を集成している。このため、出土状況写真や遺構図で壺の出土状況が確認できる例のみの集成である。井戸の「まなこ」が出土する遺跡も扇が出土する遺跡の性格と類似している可能性が高いように思う。

井戸から出土する壺は、井戸の底位から出土する例と、中位から出土する例と、上位から出土する例がある。また、壺は完形のもの、一部を故意に打ち欠いている例がある（表 11、12 参照）。

滋賀県中畑遺跡Ⅱからは 8 世紀後半から 11 世紀後半にかけての井戸祭祀を確認できた井戸がある。その中の SE4 からは口縁部を打ち欠いた須恵器双耳壺が出土しており、この壺がまなこである可能性が考えられる。この井戸は 8 世紀末に埋め戻されたと考えられている。この遺跡の埋井の祭祀は 6 例あり、7 世紀中や 8 世紀末に埋められた井戸からは口縁部を打ち欠いた須恵器が出土し、10 世紀に埋められた井戸からは完形の土師器坏が出土し、11 世紀に埋められた井戸からは黒色土器と土師器皿が出土しており、埋井祭祀に使用された道具の時期差がみられる。

中畑遺跡の例をみると、まなこを使用するのは古い祭祀方法で、黒色土器を使用するのは新しい祭祀方法といえるかもしれない。興福地遺跡では、新古両形態が合わさったものといえるようである。

おわりに

興福地遺跡の鎌倉時代に埋められた井戸から出土した扇を発端として、扇が出土している遺構と遺跡の性格を追い、祭祀に関する文献を読んできた。すべての遺跡を抽出できているわけではなく、文献も読み足りないものがあるかとは思いますが、現段階で少し見えてきたものがある。

扇には呪力があると信じられ、国家の安寧と秩序、自然の順当な循環、およびそれによってもたらされる年穀の実りを祈る祭りに使用されている。扇はそれを所持し使用する人が限られておりそのため出土例が限られている。扇が出土する遺跡は扇を所有できた人が扇を使用して祭祀を行ったことを示し、それは奈良時代から鎌倉時代まで連綿と受け継がれているといえるのではないだろうか。

興福地遺跡における 12 世紀初頭に位置付く扇を使用する祭祀は、神々の世界とこの世との接点である井戸で行われた祭祀であり、その祭祀具は扇とともに「白と黒」の土器を使用して「太一」と「天」を祀り、併せて埋井の祭祀には古式の祭祀具である「まなこ」を用いる。このような用具を伴う祭祀を行い得る階層は、集成した事例をもとに推定すると、荘園領主クラスが想定でき、興福地遺跡はその屋敷跡とその周辺施設と考えられるのではないだろうか。

注

1) 「井戸は、地上から地下深く掘鑿され、この世とカミの住まう地下他界とを直接結ぶ中空構造物という意味では、これ以上の見本をないというほど、典型的な通路であった。（中略）井戸を埋めるということは、どのような代替手段を講じても、基本的にはカミの通路と籠り場を塞ぐことを意味する。（中略）古来、わが国では、カミの世界（異界）にも戻れず、この世にも戻れず、カミの世界とこの世との境界でさまようカミ（靈魂）は、悪霊や鬼神、妖怪となって、この世に生きる人々

- に災異をおよぼすと信じられてきた。このため、人々は井戸を埋めるとき、井戸の中にカミが閉じこめられることを大変恐れた。」（秋田 2002）
- 2) 「谷川の岸の流れ、橋のたもと、路の辻は、いずれもこの世とあの世との接点であったとすることができる。（中略）辻は、死者の霊があの世界に行くための入口として意識されていたといえる。換言するならば、辻は様々な霊の集まる場所であり、あの世の入口として霊が閉じこめられたり、移動している地域だと思われていたのである。（中略）辻という場所においては、この世に出現する霊や神を慰めたり鎮めたりするための祭りが行われた。（中略）古代末から中世初めにかけて辻での祭が多く見られるようになる。（中略）支配者の側が主体となり、辻祭と同じような意味を持った祭礼が道饗祭（みちあへのまつり）である。（中略）天下に疫病がある時に、京城、もしくは皇居の四隅でこの祭りを行っている。（中略）この道饗祭を『古事類苑』は、（中略）京城の四隅で疫神を祭るのを四角祭、国の四境で疫神を祭るのを四境祭と称するというのである。（中略）起源は文武天皇の『大宝令』に見え始め、王朝時代はもとより、鎌倉幕府に於いてもまたこれが行われた（延喜式、吾妻鏡）。（中略）こうして災いをもたらす神や霊などを、都城の中に入れまいとする国家的な呪術行為が道饗祭であった。（中略）山や川、沢、谷、海などは、それ自身が神々の世界とこの世との接点になるものとして意識されていた。」（笹本 2003）。
- 3) 「各国の国司に任されたと推定されるものとして、神社修理や山・川等の自然神への祈願が挙げられる。8世紀段階では、道饗祭、鎮火祭、大祓など、都城で行われていた神祇祭祀が、国衙でも国司の手で臨時に実行されていた。9世紀段階では、臨時祭の名神祭に色々な機能（祈雨、疫病、豊稔祈願等）が付与され多用された。畿外では畿内近辺の重要地や七道の重要地、対蝦夷関係のためか陸奥国が多いようである。」（西宮 2004）
- 4) 「年代の分かる最も古い絵馬は、平城京左京二条二坊五坪南を東西に通る、二条大路の北側溝の南で検出された溝から出土したものである。ここは長屋王邸の東北に近接した地にあたる。この絵馬は、搬出した木簡が天平八年（736）から同十年の間のものであることから、同じ時期のものと考えられている。馬の体部には丹が塗られ、止雨の祈願に使われたものである。他に桧扇、曲物、挽物などの木製品が大量に出土し、人形、鳥形、斎串なども含まれているが、祭祀具の割合は低い。天平八年十一月十九日の記事に、秋の収穫が著しく損害を受けたので田租を免ずることが見える。あるいはこの時のことかもしれない。」（森 2013）
- 5) 「748年には越中国司の相伴家持が、能登巡行に際して「気多神宮」に参拝している。渤海との交易や、東北に向かう基地として重要な位置を占め、気多神は能登を代表する神になっていた。平安時代初めの804年には、希望者が多い宮司の任命は神祇官が関与する事となった。また、855年には気多神宮寺に三名の僧が公認され、868年には清和天皇の病氣平癒祈願のために能登国司が僧に金剛般若経を気多神社で読ませている。9世紀代のシャコデ廃寺や寺家遺跡では、大型の建物跡が発掘されており、文献資料に残る気多神社の隆盛ぶりを証明している。」（石川県立埋蔵文化財センター1988）
- 6) 「なぜ蒲葵（びろう）が扇の起源と推測されたのか。一口にいえば、出雲の美保神社に古く伝わるお祭り、蒼柴垣神事に重用される「長形の扇」が蒲葵そっくりだったからである。（中略）沖縄において蒲葵は御嶽（うたき）の神木となっている。御嶽というのは本土の神社に相当する神の祭祀処である。もし、御嶽の神木、蒲葵を真似して扇がつくられたとしたならば、なぜそういうことをしなければならなかったのか。（中略）ピロウを御嶽（日本の神社の祖型と考えられる神霊祭祀の場所）の神木とされている。したがってピロウの生の葉は威力がもっとも強く、「祓い」につかわれる。重要な祭儀には不可欠である。（中略）檜扇はその模倣した樹木、あるいはその葉のもつ神性、呪物性を抽出した模造の葉である。呪力はその模倣としたものの葉にあるのだから、忠実にその葉を真似るだけでよかった。それで呪物になり得たのである。（中略）人間の生誕は女だけでは起こりえない。もし御嶽の形が女陰を象るものならばそこにはかならず男性を象るものがなければならぬだろう。御嶽における男性の象徴がほかならぬ蒲葵だと思われる。」（吉野 1970）

7) 「古くは櫛は縦櫛が多く、形が蛇の頭部に相似だったので、同じく蛇に似た古代の箸とともに、蛇相似の呪物として古典の中に登場する。一方、女性の髪は、長いものということで蛇に見立てられ、髪に櫛を挿すことは、祖霊の蛇と同化することであった。」(吉野 2005)

「世界各原始民俗は蛇を祖先神として崇拝した。そのもっとも根源的な理由を私は次の三点にしぼって考えてきた。

- 1 外形が男根相似(生命の源)
- 2 脱皮による生命の更新(永遠の生命体)
- 3 一撃にして敵を仆す毒の強さ(無敵の強さ)」(吉野 2005)

8) 赤、白、黒に関係する記述には次のものがある

「古来、祈雨祈晴に黒馬・白馬が神社に奉獻されたが、生きた馬の代わりに、板に描かれた馬が納められるようになり、それが絵馬の起源となっている。(中略)「雨を降らせて下さい」と神に祈るときには黒馬が捧げられ、「雨をやめ、お天気にして下さい」と祈る場合には白馬が供獻された。(中略)『続日本紀』宝龜元年八月条に、「日蝕有り。……幣帛及び赤毛の馬二疋を、伊勢の太神宮に奉らしまる。」とみえる。火気の相乗作用が期待出来る赤馬が、日蝕に際し、衰えた太陽の復活を祈求する呪物として、神に捧げられたのである。」(吉野 2005)

「弥生時代前期の土坑だけでなく、弥生時代中期中葉以降の「井戸」、さらには律令時代以降の井戸からも炭や灰が数多く検出されている。現在でもカミマツリに火は使われており、カミマツリに火が重要な意味をもっていたことを示唆している。「井戸」や「井戸」以外の遺構から出土する木器のなかにも、火の痕跡があるものもあり、さまざまな場面で火を使用したことが知られる。火は木や鉄、悪霊をも焼きつくし、日本人がもっとも重視する清浄をもたらす強い霊力をもっていた。このため人びとは、カミマツリには必ず火を使用し、穢れを祓ったのである。炭や灰も火に関係しているので、霊力を認めて土坑や「井戸」に投入したことは疑いえない。」(秋本 2010)

「陰陽五行説とは簡単にいえば、宇宙間における森羅万象を、陰と陽の関係において据えようとする二元論であって、天象には太陽(日)と太陰(月)の二元があり、人象には男女両性がある。この陰陽が互いに交感・混合して万物は生成化育・榮枯盛衰をくりかえす、というのである。最重要な二元対立は女と男で、陰陽といえば女と男の同義語でさえある。」(吉野 1974)

「陰陽思想によれば、「陰」と「陽」はその本性を全く異にし、相対する二元である。たとえば、

- ・「陽」 天・剛・動・有・男
- ・「陰」 地・柔・静・無・女 の如くである。」(吉野 2005)

「中国哲学の根本にあるものは、天地同根の思想であって、元来、同根の天と地は離れてはならない。天地・陰陽は互いに交感しあってこそ、万物は生じ、五行の輪廻によって万物は永生を保証されるのである。」(吉野 2005)

「五行でいえば、赤は火・陽、黒は水・陰を意味するから、紫は陰・陽を一つにした太極・太一の象徴となる。」(吉野 2005)

「黒色によって象徴されるものは、冬、北、夜、暗黒であって、物の生命が生まれ、萌す暗黒の胎内でもある。」(吉野 2005)

「十二支では「子」は正北・冬至。五行では「水」。以上を総合すると「子」とは、

混沌＝太極＝北＝冬＝水＝陰陽混沌＝中央

ということになる。」(吉野 1999)

「沖縄先島地方の豊年祭りアカマタ・クロマタの祭事では、水と火か祭りの主導権を持つ。「クロ」は北・陰・女、「アカ」は南・陽・男の理論をとってクロマタを女神、アカマタを男神としている。陰陽の交合は水を招び、それによって稲の豊作もまた期待できる。「性」は日本古代信仰の基本に据えられているものであるが、それを陰陽五行思想の導入によって理論化し、呪術の効果を更にたかめようとしている。その意図がこの祭りにも十分にうかがわれる。」(吉野 1974)

「赤は火で陽、黒は水で陰、となるから赤黒のワンセットとして出現するアカマタ・クロマタは、水火・陰陽の統合体である。陰陽二元の統合体とは、原初唯一絶対の一元的存在としての「混沌」、易でいう「太極」の具象化であって、これは神縄の信仰におけるニライの本質と一致する。(中略) 更には火は日照、水は降雨に還元されるからアカマタ・クロマタのワンセットは日照降雨のバランスを象どる神でもあって、正に豊年を招く神である。アカマタ・クロマタは豊年祭にもっともふさわしい祭神なのである。」(吉野 2005)

「「水」と「火」の象徴するものは「五行説図表」で見られるように、

水=陰(女)・北・黒・冬・(十二支の)子(ね)

火=陽(男)・南・赤・夏・(十二支の)午(うま)

である。」(吉野 1974)

「日本の祭祀の多くの場合、1 国家の安寧と秩序、2 自然の順当な循環、およびそれによってもたらされる年穀の実りを祈るものである。」(吉野 1984)

「三重県多気郡明和町の齋王宮跡からは、径 25cm、深さ 30cm の穴から黒と白の丸い海石がぎっしりつまって出土している。伊勢神宮の祭祀には中国哲学が根強く入っており、白色の象徴するものは北一白坎宮(「太一」の居所)水気、および西北六白乾宮金気であり、黒色の象徴するものは五行における北の子(ね)で北辰を意味する。西北六白の象徴するものの主要なものは、乾坤の乾、つまり天であり、太陽である。そうして円いものであり、乾は堅に通じるところから固い石である。そこで以上を総合するとこの遺跡の中で、白と黒の円い石のつまった穴(坎)の上は、おそらく齋王宮内でもっとも神聖な神座であったに相違なく、そこは「太一」の居所であると同時に、日月星辰の集中する天であったと思われる。」(吉野 1975)

9)「まなこ」という言語に関する記述には次のものがある。

「「マ」は、古語の時代から見られる「真結び・まむずび」「真草・まくさ」「真砂・まさご」「真玉・またま」などの「真」と思われる。「ナ」が「魚」を意味した時代は『万葉集』以前である。「コ」や「ゴ」は、「小」や「粉」の意味で、「こまかく」「こな状」になったことを意味する。「コ」や「ゴ」の音は「ク」や「グ」に変化する。言葉の発生順序に関してはどちらが先かは分からない。因みに『広辞苑』は「ク(処)」は「住みか」の「カ」や「都」の「コ」の語源で、「ところ(処)」の意味であると解説している。」(具志堅 2006)

「吉野仙拓枝(やまひとつみのえ)伝説は白川静氏の説によると、桑は聖なる木であり、魚は女性の隠喩、梁はその魚を捕まえる施設となりますので、水辺が陰陽結合の場であったことを物語るのでしょう。」(金子 2005)

「まな板は真魚板と書かれるように、本来は真魚箸(まなばし)と呼ばれる丈の長い箸を使って儀式用の魚を料理するために用いられたもの」(秋田 2010)

「「古代においては「まつり」の対象は一定した場所ではなく、山、沼、海中の島、峠など種々さまざまで、自然の神霊の宿るすべてのものが目標として行われた。磐や木や葉にも霊質(マナ)があり、アニミズムの時代でもあった。」(甲斐 2013)

「『丹後国風土記』逸文に、比治山の頂きにある真奈井と呼ばれる井泉に現れた乙女の話があります。真奈井は「聖なる井泉」という意味で、神意が現れる神聖な場にある井泉が真奈井なのです。出雲地方に井泉を祀るとみられる神社が『延喜式』に散見され、国府のある意宇郡には真名井神社があげられます。」(辰巳 2005)

「日本書紀上巻の瑞珠盟約に「天真名井(あまのまなる)が出てきます。井戸が男女会合の場であり、井戸における祭儀には誓約もあります。井戸は陰陽が結合する場、エネルギーに満ちた場とすると同じことは水辺にも云えます。流れにおける祭儀になるでしょうか。神話では井戸には御井神があり、罔象女神(みずはのめのかみ)(弥都波能売神)が護るといいます。」(金子 2005)

「島根県三田谷 I 遺跡からは「麻奈井」の墨書がある土器が出土している。この墨書土器は岩盤の掘込から湧出した水が流

れる溝から出土している。」（島根県教育委員会 2000）

「古代人は壺や甕などの容器には、霊をこめそれを殖やす強い力があると信じた。古代人は壺など容器には霊がこもるだけでなく、容器自体を神聖視したのであり、小孔の有無は問題ではあるまい。この思想は、律令制度の成立に左右することなく、生き続けたのである。」（金子 1996）

<引用・参考文献>

- 秋田裕毅 2002『下駄』神のはきもの ものと人間の文化史 104
- 秋田裕毅 2010『井戸』 ものと人間の文化史 150
- 伊東隆夫、山田昌久 2012『木の考古学』出土木製品用材データベース
- 甲斐弓子 2013「鎮めと除災歳時記」『鎮めとまじないの考古学』上 ―古代人の心―
- 金子裕之 1996「壺と壺」『まじないの世界』I（縄文～古代）日本の美術第 360 号
- 金子裕之 2005「令制下の水とまつり」『水と祭祀の考古学』
- 具志堅敏行 2006『古代琉球語の旅』
- 笹本正治 2003『辻の世界』―歴史民俗学的考察―
- 静岡県 1994『静岡県史』通史編 1 原始・古代
- 島根県教育委員会 2000『三田谷 I 遺跡』(Vol. 2)
- 中村清兄 1983『扇と扇絵』日本の美と教養 23
- 奈良県教育委員会 1961『橿原』
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録』近畿古代篇 奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊
- 西宮秀紀 2004『律令国家と神祇祭祀制度の研究』『水と祭祀の考古学』
- 辰巳和弘 2005「常世・女・井」―神話の土壌―
- 宮脇祥三 2008「扇子―その歴史から扱い方まで」『扇子』NHK「美の壺」
- 森郁夫 2013「自然災害と鎮め」『鎮めとまじないの考古学』下 ―鎮壇具からみる古代―
- 吉野裕子 1970『扇』（ただし、『吉野裕子全集』第 1 巻 2007 所収のもの）
- 吉野裕子 1974『日本古代呪術』（ただし、『吉野裕子全集』第 2 巻 2007 所収のもの）
- 吉野裕子 1975『隠された神々』（ただし、『吉野裕子全集』第 2 巻 2007 所収のもの）
- 吉野裕子 1984『易と日本の祭祀』（ただし、『吉野裕子全集』第 6 巻 2007 所収のもの）
- 吉野裕子 1999『易・五行と源氏の世界』（ただし、『吉野裕子全集』第 11 巻 2008 所収のもの）
- 吉野裕子 2005『古代日本の女性天皇』（ただし、『吉野裕子全集』第 12 巻 2008 所収のもの）

<表の引用・参考文献> 50 音順 先頭の番号は表の文献番号に対応

- 1 秋田県教育委員会 1999『払田柵跡Ⅱ』―区画施設―秋田県文化財調査報告書第 289 集
- 2 秋田県埋蔵文化財センター2005『厨川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第 383 集
- 3 秋田県埋蔵文化財センター2006『樋口遺跡』秋田県文化財調査報告書第 411 集
- 4 穴水町教育委員会 1980『西川島』Ⅰ穴水盆地における中世遺跡群の調査
- 5 穴水町教育委員会 1981『西川島』Ⅱ美麻奈比古神社前遺跡・古代中世編
- 6 穴水町教育委員会 1987『西川島』能登における中世村落の発掘調査
- 7 穴水町教育委員会 1997『美麻奈比古神社前遺跡』
- 8 石川県立埋蔵文化財センター1986『寺家遺跡発掘調査報告Ⅰ』能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書
- 9 石川県立埋蔵文化財センター1988『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書
- 10 石川県立埋蔵文化財センター1997『寺家遺跡』県営ほ場整備事業羽咋西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
- 11 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995『志羅山遺跡第 14・25 次発掘調査報告書』―閑遊水地事業関連発掘調

- 査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 216 集
- 12 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995『柳之御所跡』一閑遊水地・平泉バイパス建設関連第 21・23・28・31
・36・41 次発掘調査 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 228 集
- 13 岩手県教育委員会 2000『柳之御所遺跡』第 50 次発掘調査概報岩手県文化財調査報告書第 107 集
- 14 岩手県教育委員会 2001『柳之御所遺跡』第 52 次発掘調査概報岩手県文化財調査報告書第 111 集
- 15 岩手県教育委員会 2003『柳之御所遺跡』第 56 次発掘調査概報岩手県文化財調査報告書第 117 集
- 16 岩手県教育委員会 2004『柳之御所遺跡』第 57 次発掘調査概報岩手県文化財調査報告書第 118 集
- 17 いわき市教育委員会 2001『荒田目条里遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書第 75 冊
- 18 大阪府教育委員会 1981『大蔵司遺跡発掘調査概要』一浦堂地区 C 地点の調査一
- 19 大島町教育委員会 1995『富山県大島町 北高木遺跡発掘調査報告書』
- 20 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1993『鹿田遺跡』3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 6 冊
- 21 香川県教育委員会 2000『鴨部・川田遺跡Ⅱ』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 9 冊
- 22 鹿児島県立埋蔵文化財センター2002『小倉畑遺跡』
- 23 神奈川県立埋蔵文化財センター1986『千葉地東遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 10
- 24 金沢市教育委員会 1991『金沢市千木ヤシキダ遺跡』Ⅱ
- 25 金沢市埋蔵文化財センター1999『金沢市磯部カンダ遺跡』
- 26 金沢市教育委員会 2000『戸水遺跡群Ⅱ 戸水大西遺跡Ⅰ』金沢市文化財紀要 160
- 27 岐阜県文化財保護センター2015『興福地遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第 132 集
- 28 神戸市教育委員会 2001『御蔵遺跡第 4・6・14・32 次発掘調査報告書』御管西地区震災復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 29 御殿・二之宮遺跡調査会 1995『御殿・二之宮遺跡 第 6 次発掘調査報告書』
- 30 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集
- 31 財団法人石川県埋蔵文化財センター2003『金沢市 戸水 C 遺跡・戸水 C 古墳群 (第 11・12 次)』
- 32 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 92 集
- 33 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1982『鳥羽離宮跡調査概要』
- 34 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013『平安京右京三条一坊六・七町跡一西三条第 (百花亭) 跡一』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-9
- 35 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター2001『西鴨地遺跡』四国横断自動車道 (伊野～須崎間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 36 財団法人浜松市文化協会 2002『梶子北 (三永)・中村遺跡』一井戸・木製品編一
- 37 財団法人浜松市文化協会 2005『中村遺跡』一遺構本文編一
- 38 財団法人浜松市文化振興財団 2006『中村遺跡』一古墳・奈良時代編一
- 39 財団法人浜松市文化振興財団 2006『中村遺跡』一中世編一
- 40 財団法人東大阪市文化財協会 1997『水走遺跡第 3 次・鬼虎川遺跡第 21 次発掘調査報告』
- 41 財団法人山形県埋蔵文化財センター1995『大坪遺跡第 2 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 23 集
- 42 財団法人山形県埋蔵文化財センター2001『志戸田縄遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告

書第 92 集

- 43 滋賀県教育委員会 1987『矢倉口遺跡発掘調査報告書』—国道 1 号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告書第 3 冊—
- 44 滋賀県教育委員会 1994『北萱遺跡発掘調査報告書』—草津川改修事業に伴う発掘調査報告書—
- 45 滋賀県教育委員会 2005『中畑遺跡Ⅱ』草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報告Ⅷ
- 46 島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡』Vol. 2 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ
- 47 島根県教育委員会 2000『三田谷Ⅰ遺跡』Vol. 3 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ
- 48 島根県教育委員会 2004『史跡出雲国府跡』— 2 —風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 15
- 49 島根県教育委員会 2008『史跡出雲国府跡』— 5 —風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 18
- 50 島根県教育委員会 2009『史跡出雲国府跡』— 6 —風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 19
- 51 上越市教育委員会 2009『子安遺跡』
- 52 高岡市教育委員会 2002『中保 B 遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第 8 冊
- 53 多賀城市教育委員会 2003『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 70 集
- 54 多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 75 集
- 55 高槻市教育委員会 1981『嶋上郡衙跡発掘調査概要』 5 高槻市文化財調査概要
- 56 徳島県教育委員会 1995『黒谷川宮ノ前遺跡』四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 9
- 57 徳島県教育委員会 2006『観音寺遺跡Ⅱ』（観音寺遺跡木器篇）—一般国道 192 号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査— 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 68 集
- 58 徳島県教育委員会 2007『観音寺遺跡Ⅳ』道路改築事業（徳島環状線国府工区）関連埋蔵文化財発掘調査報告書 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 71 集
- 59 徳島県教育委員会 2008『観音寺遺跡Ⅴ』道路改築事業（徳島環状線国府工区）関連埋蔵文化財発掘調査報告書 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
- 60 中条町教育委員会 1999『中倉遺跡』 3 次
- 61 中条町教育委員会 2001『船戸桜田遺跡 2 次調査』
- 62 奈良県教育委員会 1961『橿原』
- 63 奈良県教育委員会 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査—
- 64 奈良国立文化財研究所 1974『平城宮発掘調査報告』Ⅵ平城京左京一条三坊の調査
- 65 奈良国立文化財研究所 1982『平城京発掘調査報告』Ⅺ第 1 次大極殿地域の調査
- 66 奈良国立文化財研究所 1989『平城宮八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 46 冊
- 67 奈良市教育委員会 1980『奈良市埋蔵文化財調査報告書』—昭和 54 年度—
- 68 奈良市教育委員会 1984『平城京左京二条二坊十二坪』奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告
- 69 新潟県教育委員会 1994『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 60 集
- 70 新潟県教育委員会 1999『牛道遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 91 集
- 71 新潟県教育委員会 2006『一般国道白根バイパス関係発掘調査報告書 浦廻遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第 126 集
- 72 新潟県豊浦町教育委員会 1981『曾根遺跡』Ⅰ
- 73 新潟県教育委員会 2006『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅦ 野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 164 集

- 74 新潟県教育委員会 2008『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅶ 姫御前遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第184集
- 75 新潟県教育委員会 2008『一般国道116号 出雲崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅵ 寺前遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第189集
- 76 新潟県教育委員会 2009『北陸新幹線関係発掘調査報告書ⅩⅢ 一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ 田伏山崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第205集
- 77 新潟県教育委員会 2012『一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅷ 北陸新幹線関係発掘調査報告書ⅩⅩⅠ 山岸遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第228集
- 78 新潟県教育委員会 2012『一般国道8号白根バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 小坂居付遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第238集
- 79 新潟市教育委員会 1993『新潟市の場遺跡』
- 80 浜松市教育委員会 2002『伊場遺跡』遺物編8、補遺編、総括編伊場遺跡調査報告書第10～12冊
- 81 日高町教育委員会 1986『川岸遺跡発掘調査概報』
- 82 兵庫県教育委員会 1997『砂入遺跡』兵庫県文化財調査報告 第161冊
- 83 広島県教育委員会 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』北部地域南半部の調査
- 84 平泉町教育委員会 1993『平泉遺跡群発掘調査報告書』泉屋遺跡8次、無量光院跡1次、佐野原遺跡第1次、志羅山遺跡第21次発掘調査 岩手県平泉町文化財調査報告書第34集
- 85 古川町教育委員会 1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告』古川町埋蔵文化財調査報告 第5集
- 86 平安京調査会 1975『平安京跡発掘調査報告』—左京四条一坊—
- 87 松阪市教育委員会 2006『草山遺跡発掘調査月報』No.1～No.10(増刷合冊)
- 88 三重県埋蔵文化財センター1996『上ノ垣外遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 123-2
- 89 宮城県教育委員会 1995『山王遺跡Ⅱ』多賀前地区 宮城県文化財調査報告書第167集
- 90 宮城県教育委員会 2001『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第184集
- 91 山梨県教育委員会 1997『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集
- 92 四日市市遺跡調査会 1992『上野遺跡2』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書Ⅸ
- 93 米沢市教育委員会 2001『古志田東遺跡』林泉寺住宅団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書

写真 1

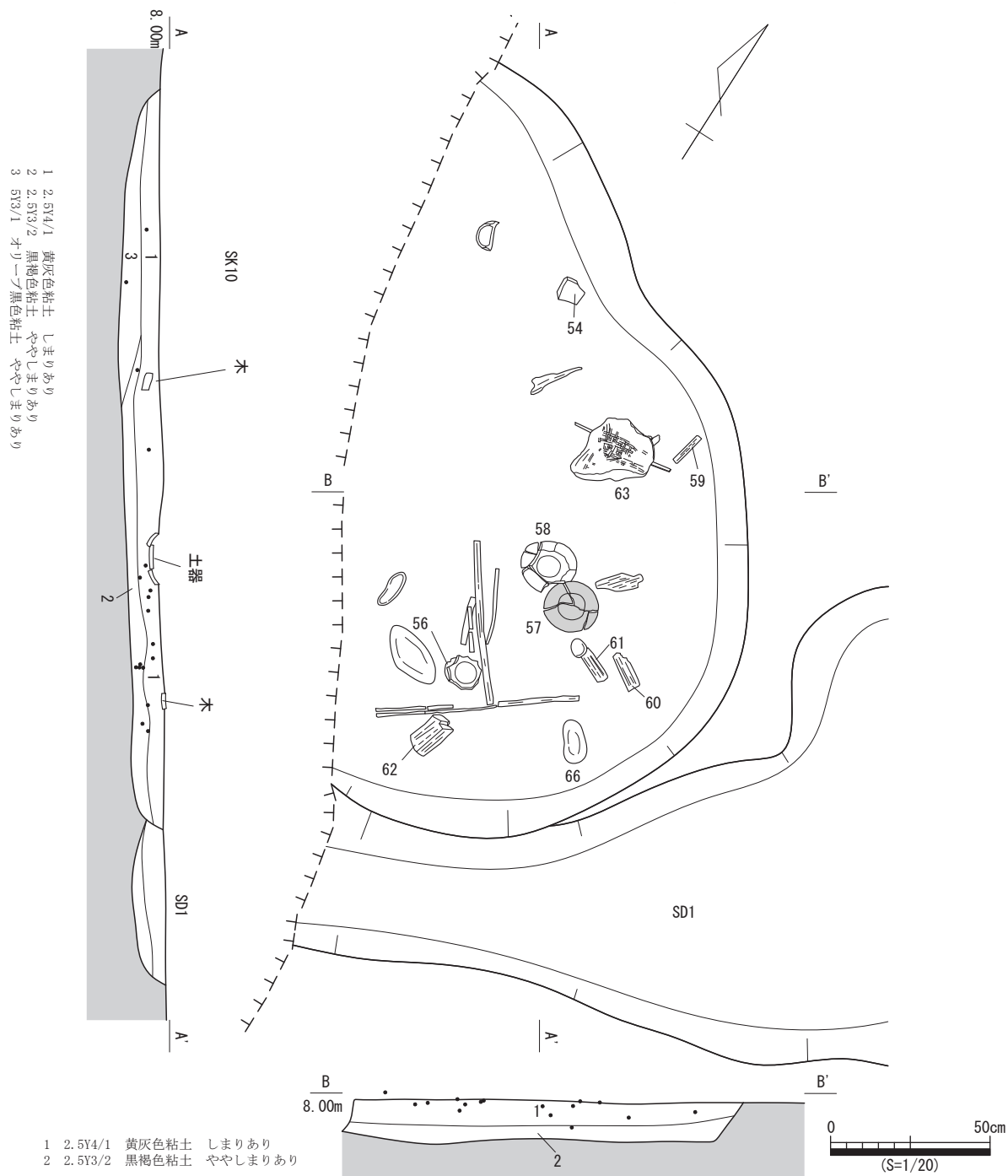


図1 興福地遺跡 SK10遺物出土状況図

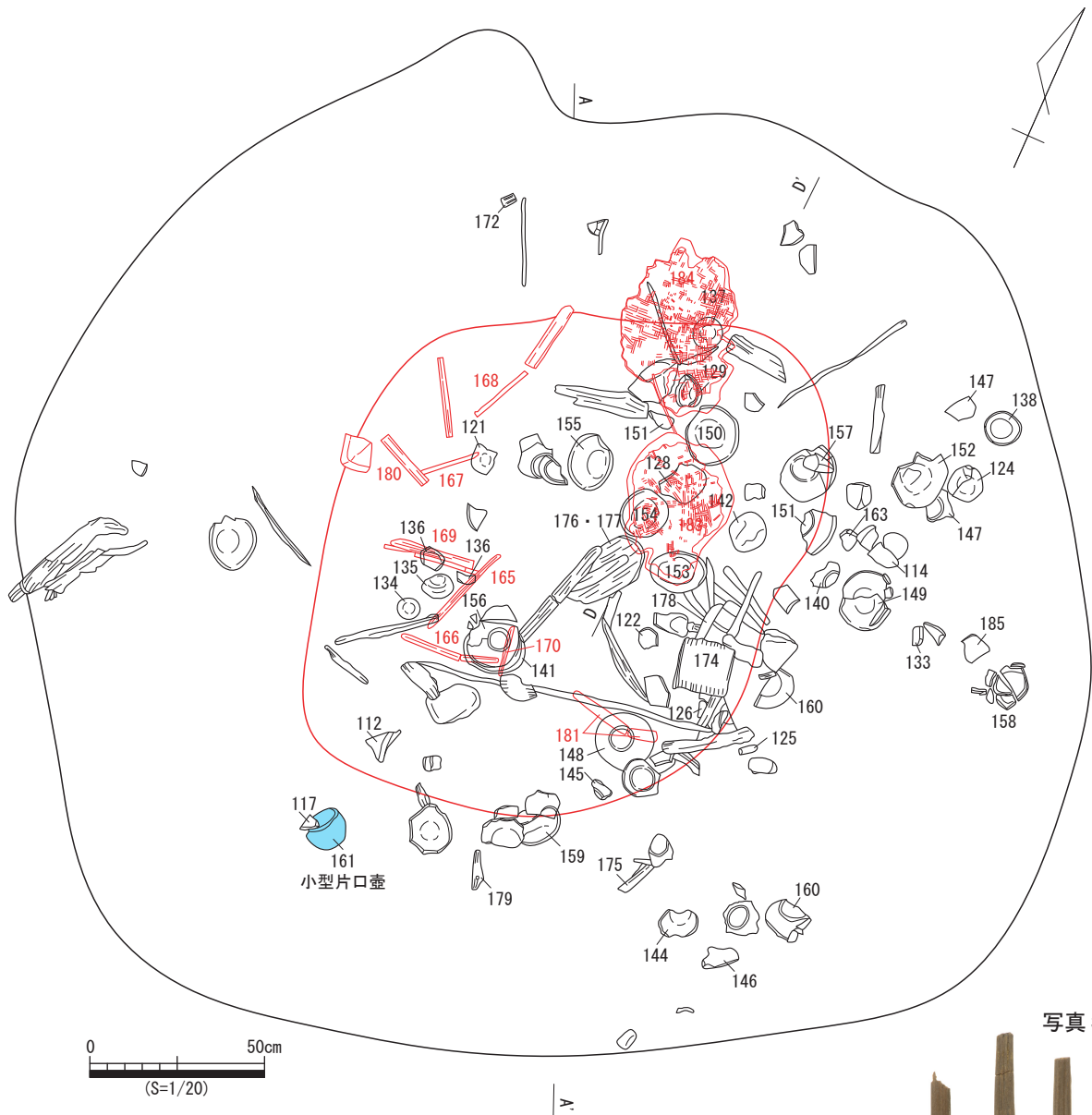


图2 興福地遺跡 SE3遺物出土狀況図

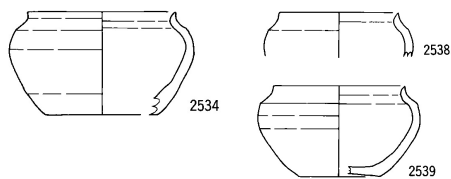
写真2



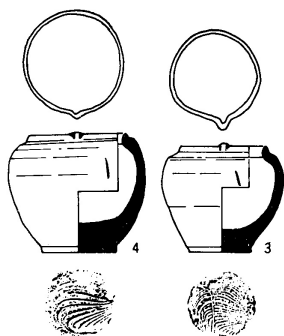
写真3



美濃須衛産鉢・壺実測図

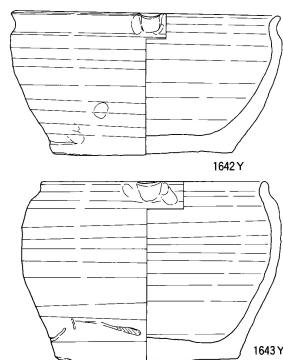
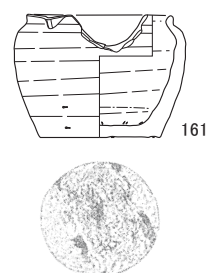


柿田遺跡 美濃須衛産
灰釉系陶器短頸鉢（包含層出土）

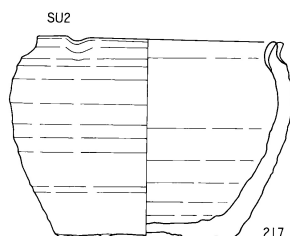


稲田山16号窯 蓋, 小壺
『各務原市史』1983 から転載

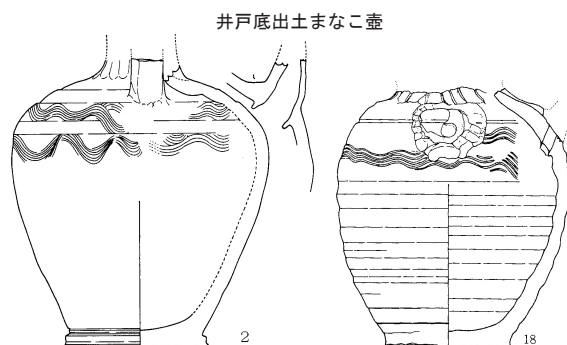
興福地遺跡
美濃須衛産小型片口壺
(SE3 出土まなこ壺)



船山北3号窯
片口鉢（灰原出土）



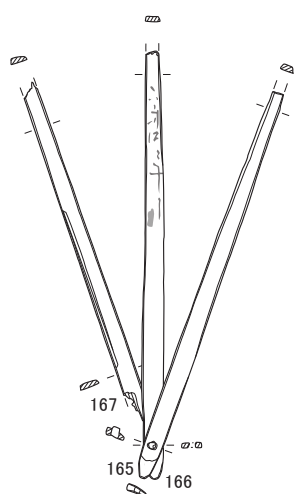
野俣遺跡 美濃須衛産三口鉢
(遺物集中地点 SU2 出土)



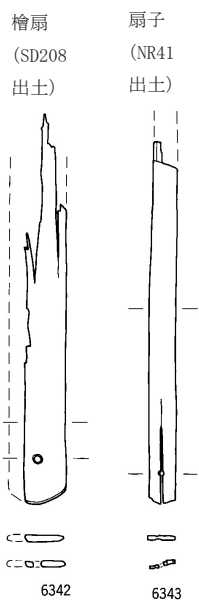
大町・縄手遺跡 珠洲窯産
注口 (SE1 出土まなこ壺)
『西川島』1987 から転載

桜町遺跡 珠洲窯産
注口 (SE1 出土まなこ壺)
『西川島』1987 から転載

扇実測図



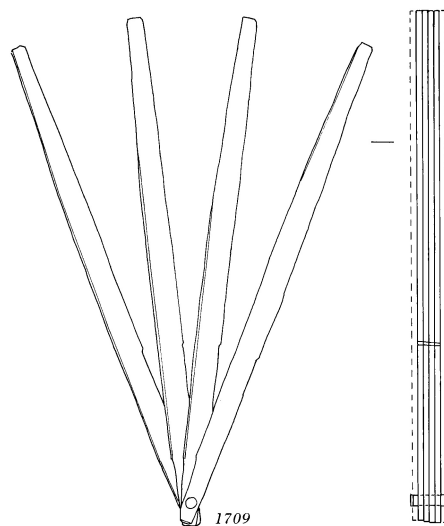
興福地遺跡 扇子 (SE3 出土)



柿田遺跡 扇



千木ヤシキダ遺跡
扇子 (SE02 出土)
『金沢市千木ヤシキ
ダ遺跡』II から転載



鳥羽離宮 扇子 (SD4 出土)
『鳥羽離宮跡調査概要』1982
から転載

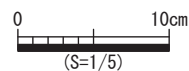


図3 美濃須衛産壺、まなこ壺、扇実測図

表1 扇出土遺跡一覧表(1)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格					
興福地遺跡 文献27		3本	SE3	井戸底	12世紀初	165~ 167	(28.60)	1.20	0.30	干押木、爪、板状木製品、山茶碗 碗・皿、美濃須賀産小型片口壺・ 甕破片、白磁碗、土師器皿、伊勢 型織	白黒の セット山 茶碗	トウ ヒ属	荘園関連施設					
柿田遺跡 文献32	1枚		SD208		7世紀中~ 11世紀前半	6342	(26.00)	(4.00)	0.60	形代(人形、剣形、馬形)、斎 串、火付け木、箸、杓子状木製 品、農具、火きり臼、鞍、皿、曲 物、建築部材、須恵器、灰釉陶器		-	荘園管理者の居住 域、条里集落					
		1本	NR41		11世紀後半 ~13世紀 中	6343	(24.20)	2.00	0.20	形代(刀形)、火付け木、糸巻、 箸、曲物、漆器、土師器甕、須恵 器、灰釉陶器壺、白磁壺		ヒノキ	屋敷地					
杉崎廃寺 文献85	3枚		包含層		8世紀末 ~9世紀 初頭	170~ 172	23.50	4.00	0.40	-		ヒノキ	古代寺院					
平城宮第 1次大極 殿地域 文献65	4枚		SB7802	柱抜 取痕 跡の 埋土。	天平勝宝5 年以降に 廃絶。	10	30.40	1.8~3.0	0.16	木筒、横櫛、人形、鳥形、刀形、 匙、匙形木製品、杓子形木製品、 曲物、折敷、方形鉢、土師器(暗 文有り、灯火器)、須恵器、墨書 土器、転用硯、漆付着須恵器、刻 印土器、土鏝14点	無	ヒノキ	南面築地回廊上に 建設された第I期 の東棟。第II期の 宮殿建設に先立ち 撤去される。					
	1枚					11	(11.60)	2.10	0.18		無	ヒノキ						
	2枚		SD5505	-	平安時代	14	17.10	1.8~3.4	0.13	小円板、土師器(螺旋・斜放射暗 文)、須恵器、転用硯	無	ヒノキ		東外郭にある基幹 排水溝に東方の第 2次大極殿地域か ら注ぐ東西溝。水 流激しい。				
平城京左 京一条三 坊 文献64	1枚		SD650	A(下 層)	平安時代 初期	124	(15.90)	2.60	0.25	大型人形、人形、物忌礼、刀形、 鎌形、矢形、鳥足形、火燭宝珠形 木製品、車輪形木製品、櫛、箸形 木製品、曲物、折敷、挽物、杓 子、匙形木製品、糸巻、紡錘車、 物差し、横櫛、臼形木製品、箱、 几脚、下駄、鳥絵のある板、車 輪、琴柱、弓、火鑽臼、木杵状木 製品、土師器、須恵器、黒色土 器、灰釉陶器、緑釉陶器、硯、土 馬、模型土器、銭貨	黒色土器	ヒノキ	東三条大路東側溝					
	1枚					125	(16.70)	2.20	0.10			ヒノキ						
	3枚束					126~ 128	(8.80)	1.40	0.10			ヒノキ						
平城京左 京二条二 坊・三条 二坊 文献63	11枚束		SD5100	3層 (炭 層下 の木 屑層)	C期 奈良 時代中頃 729~745 年頃	190	32.50	3.60	0.20	木筒(年紀は神亀2年(725)~天平 11年(739))、墨画板、土師器、 黒色土器、墨書土器、暗文土器、 製塩土器、須恵器、奈良三彩陶 器、陶硯、多量の土師器の灯明 器、ミニチュア土器、木製品(刀 子鞘・柄、紡輪、糸巻、匙形、杓 子、曲物、柄杓柄、漆容器、横 櫛、縦櫛、丸鞆、鉈尾、人形、鳥 形、馬形、牛形、車輪形、舟形、 陽物形、鋤形、鋳形、刀子形、鋸 形、斎串、筆管、算木、木筒形、 独楽、賽子、琴柱、火鑽板、剃り 抜き箱、巻胎漆器)、和同開珎5 点、銅丸鞆、銅鬚、銅人形等、埴 塙、羽口台、ガラス小玉鍍型、鉈 滓、獸骨、砥石、水晶・石英・琥 珀・瑪瑙片	黒色土 器、暗文 土器	ヒノキ	二条大路南濠状 遺構。左京二条二 坊五坪の宅地、推 定藤原麻呂(兵部 卿)邸からの仏会 における万灯供養 などに用いられた ものを一括投棄と 推定。木筒38,449 点出土。					
	7枚束。 1枚に 「大宅 黒大 実」の 墨書有					191	29.30	2.90	0.20			ヒノキ						
	1枚					192	(17.70)	2.40	0.20			ヒノキ						
	1枚					193	35.30	4.20	0.20			ヒノキ						
	4枚束					194	33.10	4.20	0.10			ヒノキ						
	7枚束					195	(10.50)	1.70	0.20			ヒノキ						
	6枚束					71	20.00	2.70	0.10			ヒノキ						
	2枚束 (1枚に 墨描き 有り)					72	19.00	3.00	0.20	「泰身万歳福」と刻んだ曲物、日本 最古の絵馬、樓閣山水図板絵、 墨画板、木筒(年紀神亀5年が1 点、天平3~8年)、土師器、須恵 器、暗文土器、製塩土器、墨書土 器、転用硯、佐波理写し、木製品 (刀子柄、漆工具、紡輪、糸巻、 匙形木製品、杓子、割物鉢、曲 物、丸鞆、鉈尾、横櫛、算木、木 筒形、物指、賽子、琴柱、人形、 馬形、鳥形、刀子形、刀形、鉈 形、斎串、剃り抜き箱)、和同開 珎2点、銅丸鞆、銅環等、羽口 台、鉈滓、獸骨、砥石、琥珀片		ヒノキ		二条大路北濠状 遺構。左京二条二 坊五坪の宅地、推 定藤原麻呂(兵部 卿)邸からの廃 棄。木筒35,211点 出土。				
	2枚束					73	19.60	2.40	0.10			ヒノキ						
	6枚束					74	13.70	2.30	0.10			ヒノキ						
	1枚					75	15.80	2.50	0.20			ヒノキ						
	1枚					76	25.30	2.50	0.20			ヒノキ						
	1枚					SD5310	木屑層	C期 奈良 時代中頃	5	21.10		1.50		0.20	漆紙文書、木筒(年紀は天平8 年)、匙、刀子形、鋸形、土師 器、須恵器、鉄刀子		ヒノキ	SD5300と門を挟ん で対称の位置にあ る濠状遺構。木筒 727点出土。
	1枚					SE5220		E,F期 奈 良時代後 半から末	-	-		-		-	土師器、墨書土器、須恵器、土 馬、木製品(刀子、曲物、曲物底 板、挽物皿、杓子、斎串)	有(煤付 着土師器 椀)	ヒノキ	左京三条二坊八坪 の敷地の東北隅に ある井戸
7枚束		SE5140	下層	F期 奈良 時代末頃	25	(27.50)	2.20	0.25	宝亀7年(776)の紀年木筒(荷札 木筒)。墨書土器「官厨」。土師 器、黒色土器、灯明器、須恵器、 口縁部打欠く壺L(2点)、土 馬、木製品(刀子柄、椀、横櫛、 曲物底板、斎串、釣瓶)	黒色土器	ヒノキ	太政官厨家。左京 三条二坊七坪の敷 地の中央にある井 戸						

表2 扇出土遺跡一覧表(2)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格
平城京左 京二条二 坊十二坪 文献68	1枚		SD03 二条 大路北側 溝	B期 (新溝)	奈良時代 後半	21	(5.30)	1.90	0.20	付札・荷札木筒、横櫛、陽物形木 製品、刀子柄、糸巻、へら状木製 品、火鏝臼、曲物、漆付木製品、 土師器、須恵器、獸脚形土製品	無	-	二条大路北の十二 坪は築地塀で区画 され奈良初頭から 平安初頭の宮外官 衛、離宮、寺院。
平城京左 京五条二 坊十四坪 文献67	5枚		SE03	-	8世紀末	14~18	24.60	末幅2.6 本幅1.9	0.10	横櫛、斎串、刀子鞘、独楽、漆 器、曲物、つるべ、捨皮、炭、種 子(桃、梅、くるみ) 軒瓦、土師 器、須恵器、三彩陶器、銭貨、碁 石、ガラス玉	漆器	-	三彩、碁石、ガラ ス玉、有脚円面 硯、風字硯、形象 硯出土。
	1枚	-		19		(18.30)	(1.90)	0.10					
平城京八 条一坊十 四坪 文献66	3枚		SE2020		奈良時代 前半	13	28.00	末幅4.5 基幅1.3	0.15~ 0.2	縦櫛、曲物容器、柄杓、方形の折 敷、箸、モモの種子90点、平城宮 土器Ⅱ~Ⅴの土師器皿C、黒色土 器	黒色土器	ヒノキ	官衛風の配置をも つ建物群
平安京右 京三条一 坊六・七 町跡-西三 条第(百 花亭)跡- 文献34	6枚重ね て「奈 尔波 都」の 墨書有		井戸 470(池250 を造る前 に埋める)	木枠内	9世紀初頭 から中葉 (平安京 I期中~ 新)	木1~6	24.50	末幅3.0 基幅1.6	0.10	木筒、斎串、横櫛、棒状製品、杓 子形、箸、曲物、松明の付木、瓢 箆、土師器、黒色土器、須恵器、 緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器、 墨書土器	黒色土器	-	右大臣藤原良相の 邸宅「西三条第」 北東部。池出土遺 物は9世紀後半代 の貴族生活を示す 好資料。木筒、二 彩土器、製塩土 器、墨書土器、緑 釉陶器出土。墨書 の中には仮名文字 が含まれる。灰釉 陶器底部に「太 一」の墨書。水晶 製経輪、黒色土器 の鉄鉢形鉢出土。
	4枚まと まって 出土(小 型品)	2層				木192 ~195	23.80	末幅1.7 基幅1.0	0.20			-	
	6枚まと まって 出土(中 型品)	3層				木196 ~201	25.90	末幅3.0 基幅1.8	0.20			-	
	3枚(大 型品)	3層				木202 ~204	33.60	末幅3.2 基幅1.5	0.20			-	
	5枚まと まって 出土	3層				木205 ~209	16.60	基幅2.0	0.30			-	
	1本		2層	木210	21.70	1.00	0.30	-					
平安京左 京四条一 坊 文献86	1本	SE1	SE1	中層	平安時代 末	W12	(14.70)	1.20	0.40	土師器、人面木札		-	四条坊門小路北の 藤原国明(白河法皇 の近臣)邸推定地南 西限
	1本	Pit4				-	鎌倉時代	L57~ 62	(18.30)			0.90	
鳥羽離宮 文献33	小型品 4本東 大型品 4本東		北大路溝 跡(SD4)		平安時代 後期11世 紀末~12 世紀頃	2	(19.00)	1.00	0.40	木筒、人形、櫛、漆器椀、玉、陽 物形、下駄、土師器、須恵器、陶 器、瓦器、中国製白磁・陶器		スギ	田中殿地区金剛心 院内の九鉢阿弥陀 堂と推定
						3	34.00	1.50	0.40				
矢倉口遺 跡 文献43	1枚親骨		SE05	Ⅲ層 (中 層)	9世紀中葉 ~10世紀 初頭。	W12	22.4	2.4	0.25	横櫛、斎串、物差、尺、曲物、種 子、土師器坏(90枚以上)、須恵 器、瓦器、富寿神寶、刀子、鎌	無	-	大規模な倉庫群の 検出。木沓、尺、 増扇、墨書土器、 円面硯、緑釉陶器 出土。東海道の要 衝に所在する、規 格性をもつ官衛的 遺跡群。
	1枚親骨	W13				(14.8)	2.6	0.25	-				
	9枚閉じ た状態 で出 土、1枚 親骨	W14親骨				25.6	2.1	0.25	-				
		W14				24.8	2.3	0.1	-				
北萱遺跡 文献44	1本		B2地区包 含層(旧 河道の上 層)		7~13世紀	28	(22.1)	2.6	0.6	舟形、刀形、下駄、棒状木製品、 へら状木製品、笄塔婆、曲物、 鋤、田下駄、櫛、須恵器墨書土 器、畿内産黒色土器、近江型黒色 土器、瓦器碗、緑釉陶器、灰釉陶 器、青磁、白磁、鉄製刀子、素文 鏡	黒色土器	スギ	北川の旧河道。
大蔵司遺 跡-浦堂 地区C地点 -文献18	1枚(小 型品)		溝6		奈良時代 後半から 平安時代	73	(12.20)	2.20	0.20	横櫛、人形、刀形、鋤形、斎串、 木筒、木札、盤、曲物、折敷、 沓、下駄、鎌柄、棒状具、串、燈 火具、榎、火付木(200点以上)		-	遺跡北約500mに式 内社神服神社、南 約1kmに嶋上郡衛跡 がある。畿内小社 の国家祭祀を行っ た菰川か。
砂入遺跡 文献82	1枚		SD02・ 03、SD04		8世紀後半 から9世紀 初頭	339	20.10	2.00	0.30	人形、馬形、斎串、木筒、付札、 曲物、木皿、須恵器、墨書土器、 土師器	無	スギ	袴狭遺跡北にある 祓所。木筒、腰帶 金具出土。袴狭遺 跡からは銅印、八 稜鏡、緑釉陶器が 出土している。
川岸遺跡 文献81	1枚		SD01		8世紀末~ 9世紀前半	216	(20.60)	3.10	0.10	木筒、斎串、人形、馬形、独楽、 算木、曲物、折敷、糸巻、杓子、 箸状木製品、木履、緑釉陶器、土 師器、墨書土器	-	ヒノキ	第2次国府。祓 所。
御蔵遺跡 文献28	1本		SE201		10世紀(平 安時代中 期前半)	133	23.80	1.05	0.30	黒色土器、土師器、須恵器、緑釉 陶器、土鍾	黒色土器	ヒノキ	金属製帯金具、転 用硯、墨書土器出 土。官衛的性格を 持つ建物。

表3 扇出土遺跡一覧表(3)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格
三田谷 I 遺跡 文献46、 47		1本	木製品集 積遺構		奈良・平 安時代	14	(15.40)	1.60	0.40	呪符木簡、木筒状木製品、笏、人 形、舟形、刀形、陽物、弓、栓状 木製品、箱状木製品、木鏝、糸巻 具、案・机状木製品、剝物盤、曲 物、下駄、火鎖具、建築部材、五 輪塔、宝篋、石製紡錘車、砥石、 須恵器、製塩土器、帯金具、和銅 開珎、緑釉、赤色塗彩土師器、赤 色塗彩暗文入坯・高台坯、墨書土 器、硯、土馬	赤色塗彩 土師器、 赤色塗彩 暗文入 坯・高台 坯	-	文字資料の処理機 関(公的施設)。 1997, 98年調査の SD6からは「麻奈 井」「上井」郡名 「神門」の墨書須 恵器、木簡に郷名 「八野」「高 岸」、赤彩土器多 数出土。SK62井泉 から内外赤彩土師 器碗1点出土。多 量の土師質土器、 白磁出土。
御殿・二 之宮遺跡 6次 文献29	1枚		河道		奈良～平 安時代	46	(31.00)	3.80	0.60	木簡、荷札状木製品、横櫛、絵 馬、人形、馬形、鳥形、舟形、武 器形、陽物、齋串、棒状木製品、 下駄、杓子、浮子、曲物、人面墨 書土器、土師器、須恵器、灰釉陶 器、万年通宝、鐵	無	-	国府の境の(道饗 祭に類する)祭祀 を行っている。遠 江国府か。
伊場遺跡 文献80	1枚		大溝 ハ 2W-IV		9世紀～10 世紀	157	28.70	1.60	0.20	木簡、人形、舟形、齋串、曲物、 有孔板、挽物盤、織機具、横櫛、 槽、權、下駄、柄杓柄、須恵器、 土師器、灰釉陶器、人骨、動物骨 (牛、馬、鹿)	内面赤彩 土師器、 内面赤 彩・煤付 着土師器	ヒノキ	敦智郡衙。唐三彩 陶枕、緑釉陶器、 鍔銅製壺鈴、記年 名・郡符・文書・ 帳簿・放生会・呪 符木簡、絵馬、人 面墨面土器、陶 馬、風字硯(朱墨 痕、墨痕有)、鍔 帯金具・石帯出 土。
中村遺跡 文献37～ 39	9枚		a2区SD01 (幅4mの 区画溝)	下層 上部	平安時代 前半 (9・10 世紀)	187- 1～9	21.20	2.50	0.10	曲物、土師器、須恵器、灰釉陶器	土師器有 台皿、坯 身、鉢内 外面に赤 彩	ヒノキ	敦智郡衙関連。木 簡出土。
中保B遺 跡 文献52	1枚		SX03(豪 族層居宅 近くの水 路SD01最 下層)	4層	7世紀中頃 ～9世紀中 頃	4047	(26.60)	(3.20)	0.20	木簡、人形、馬形、船形、箸、紡 錘車、火切臼、盤、刀子柄、暗文 土器、転用硯、「案調」「津三」 などの墨書土器、赤彩土器	赤彩土器 5個体以 上(8～ 9世紀)	-	越中国府と10km離 れ水上交通拠点。 船着場、倉庫群造 営。国府関連遺跡 や砺波郡衙の出先 機関か。緑釉陶 器、暗文土器、帯 金具、木簡、暗文 土器、墨書土器、 製塩土器出土。
		4050				27.30	2.20	0.40	-				
	1枚	4051				35.40	4.00	0.15	-				
北高木遺 跡 文献19	1枚		SD100		8～10世紀	1426	17.60	1.00	0.15	木簡、付札状木製品、版木状木製 品、縦櫛、尺、靴、人形、馬形、 舟形、鳥形、琴形、鐵形、杓子、 土師器、須恵器、「介」などの墨 書土器、人面墨書土器	無	-	越中国司に属する 官の牧の地、西大 寺領中野荘か。
磯部カン ダ遺跡 文献25		10本束	南北方向 大溝 (SD16)		平安時代 (8世紀末 ～10世 紀)	47～50	28.10	1.1～2.3	0.20	横櫛、75点以上の齋串、人形、鳥 形、火鎖杵、曲物、箸状木製品、 施釉陶器、製塩土器、須恵器、土 師器、49点以上の墨書土器 「魚カ」「大野」など、刀子、銅 錢、砥石、土鏝	無	-	紀年銘木簡。船着 き場状凹地有り。 官衙的性格が強い 遺跡
千木ヤシ キダ遺跡 文献24	1枚(10 文字以 上の墨 痕。転 用木簡 か扇面 経か)		SE02(井籠 組井戸)	井戸 底	平安時代 (10世 紀)	SE02-1	(20.40)	(1.15)	-	井鑛めの祭祀具(人形、刀形、齋 串)、建築廃材、黒色土師器、須 恵器、墨書土器「魚」2点	9世紀後 半代の黒 色土師器 混入	-	「魚」の特定字句 墨書。多量の皇朝 銭、越州窯青磁、 緑釉陶器碗出土。 中心的建物に頻繁 な地鎮祭祀。
戸水C遺跡 文献31	5枚(要 無し)		SE1111	9層	平安時代 前期(9世 紀末～10 世紀)	134～ 138	(18.20)	2.30	0.35	柄杓、曲物、木皿、齋串、箸状木 製品、土師器、須恵器(蓋、坏、 碗、盤、双耳瓶)、墨書土器	無	スギ	漆紙文書、「津」 の墨書。緑釉陶器 唾壺、獸脚付円面 硯出土。港湾施設 的性格の強い遺 跡。
寺家遺跡 8、 9、10		6本束	溝か川跡		11世紀		36.50	1.70	0.25	人形、齋串、木製盤、土師器、須 恵器		スギ	国家的祭祀が行わ れた遺跡。古代神 祇信仰に関連する 遺跡。「司館」 「官厨」墨書。三 彩、銅鏡、銅鈴、 鉄鐸、ガラス埴 塙、製塩土器出 土。牛馬歯骨、土 馬出土。

表4 扇出土遺跡一覧表(4)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格
払田柵跡 II区画施設 文献1	3枚(同 一個 体、要 無し)	-	SX1192最も古い櫓 状建物の 南西L字 形溝。外 郭北門付 近。		9世紀初	15、 16、17	13.20	2.40	0.20	斎串、篋、鋤、横槌、楔、挽物 皿、曲物蓋、須恵器坏、土師器坏 (墨書、内面黒色処理)、土師器 甕、転用硯	須恵器坏 内面に 墨、土師 器坏(内 面黒色処 理)、漆 器皿	-	創建9世紀初頭、終 末10世紀後半の払 田柵。政庁、出土 木簡から、国司が 駐在し、兵士また は鎮兵が配備され ていた。天平宝字 三年(759)完成の雄 勝城か。外郭北門 正面のSD1145から 絵馬出土。
	1枚	-	SL1035外 柵南門西 の河川跡		9世紀初～ 9世紀後半	37	(23.40)	0.20	0.40	斎串、曲物底板、木錘、須恵器 坏、土師器坏、支脚	土師器坏 (内面黒 色処理)	-	
	1枚	-				38	(13.40)	(1.70)	0.40			-	
	1枚	-				39	(14.80)	2.20	0.20			-	
厨川谷地 遺跡 文献2	1枚		甲A地点 LR45水辺	III層		100-7	(13.00)	2.30	0.50	木簡、墨書土師器坏、へら書土師 器坏、須恵器(坏、甕)、灰釉陶 器碗、土師器灯明皿、内黒土師器 坏	内黒土師器 器坏	スギ	
	1枚		甲A区532 埋没旧河 道湧水点 (SD445下 部)	III層	9世紀後半 から10世 紀前半	100-8	29.20	1.80	0.30	呪府木簡、題籤軸木簡、木筒、刀 子形、斎串、箸、下駄、曲物、 楔、篋、漆書漆器椀、漆器(椀、 盤)、内黒土師器、土師器(坏、 鍋、甕)、土師器坏内漆、須恵器 (坏、蓋、壺、甕)、転用硯、墨 書土師器坏、へら書土師器坏、土 師器坏灯明皿、鉄滓	内黒土師器 器、漆器	スギ	払田柵という城柵 官衙に附設された 律令祭祀の場とし て機能。
樋口遺跡 文献3	10枚束		ST30(捨て 場)		平安時代 (9世紀後 半)	55～64	28.80	3.30	0.40	斎串、ヤス状製品、木札状木製 品、アカスクイ状木製品、楔状木 製品、棒状木製品、把手、曲物、 割物、篋、土師器(坏、高坏、 甕、壺)、砥石	土師器坏 油煙付着 20点(灯 明用)	スギ	『日本三代実録』 にある「野代宮」 近く。湧水地点の 祭祀場
古志田東 遺跡 文献93	3枚束		河川跡(大 きく蛇 行、船着 場2つ)	II～ IV層	9世紀後半 ～10世紀 初頭	8～10	25.30	2.00	0.30	木筒61点、弓、修羅、鎧、箸状木 製品、物指し、曲物、木錘、挽 物、赤焼土器(酸化焼成)、土師器 坏、須恵器坏、墨書土器、赤焼土 器に柿渋施塗	無	スギ	古代置賜郡内の有 力豪族の居館。
市川橋遺 跡第1～4 次 文献90	1枚		SD5021河 川跡		8世紀代か ら9世紀初 頭前後	557	(32.40)	2.30	0.50	斎串、横櫓、人形、馬形、舟形、 刀形、櫛、弓、つけ木、糸巻、物 差、漆篋、杓子状木製品、箸、高 坏状木製品、下駄、弓、土師器 (坏・碗・耳皿・蓋・壺・鉢・ 甕・甕)、須恵器(坏・碗・鉢・ 双耳坏・蓋・提瓶・瓶・壺等)、墨 書土器、人面墨書土器、漆付着 土器、刻書土師器、刻印須恵器、漆 書土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、 硯、瓦、羽口、埴塙、黒色土製 玉、土錘、土鈴、紡錘車、石帯、 卜骨、骨角製品	土師器 (坏・ 碗・蓋・ 壺・耳 皿)へら ミガキ黒 色処理	ヒノキ	木簡『杜家立成雑書要 略』、漆紙文書、花 弁双蝶八花鏡、竹製 横笛、奈良三彩小壺、 緑釉碗・唾壺、土鈴、 埴塙、刀子、鉄、石 帯、クルリ、弓出土。 国司クラスの上級官 人の館、国衙を中心 とした地方都市と推 定。
	1枚		SD5055河 川跡		9世紀代後 半から10 世紀初頭 前後	585	(6.20)	(2.70)	0.30	木筒、人形、木刀、箸、つけ木、 土師器、須恵器、赤焼土器、漆付 着土器、手捏土器、墨書土器、刻 書土器、人面墨書土器、灰釉陶 器、緑釉陶器、硯、転用硯、瓦、 土製円板、埴塙、羽口、石製紡 錘車、卜骨	土師器 (坏・ 碗・耳 皿)へら ミガキ黒 色処理	モミ属	『杜家立成雑書要 略』は国司や鎮守 府官人ら携行、ト ネリなどの持ち帰 りなど私的な伝 来。
市川橋遺 跡26～29 次 城南 地区南東 ブロック 文献53	1枚		SX1600東 西方向河 川跡	c層	8世紀後葉	1612	(4.80)	1.10	0.20	木筒、人形、鐵形、刀形、船形、 横櫓、下駄、漆器、挽物蓋、箸状 製品、火鑽臼、へら状製品、錘、 篋、漆紙文書、人面墨書土器、製 塩土器	漆器	-	
	1枚		SD1616東 西大路東 道路南側 溝	d層	8世紀後葉	1648	35.40	3.60	0.20	木筒、絵馬、人形、挽物皿、曲 物、箱、錘、栓、土師器(坏・ 甕)、須恵器(坏・甕・ち長頸瓶・ 瓶)、墨書土器、人面墨書土器、 灰釉陶器、紡錘車、刀、刀子、獸 脚		-	絵馬、横笛、ササ ラ、人面墨書土 器、製塩土器、漆 紙文書、帯金具出 土。
	1枚		SD1522	1層	9世紀中葉	1725	(9.50)	3.50	0.10	木筒、絵馬、斎串、錘、曲物、挽 物、土師器(坏・甕)、人面墨書土 器、墨書土器、須恵器坏、灰釉陶 器、刀子	須恵器坏 内面煤付 着、漆器	-	
市川橋遺 跡25～29 次 城南 地区北 西・南東 ブロック 文献54	1枚		SX2333		-	1695	(25.20)	2.80	0.60	-	-	ヒノキ	
	1枚		100区D106	3層	-	1816	23.50	1.80	0.30	-	-	ヒノキ	漆紙文書、緑釉陶 器、製塩土器、人 面墨書土器出土。
	1枚		SD2234	2層	-	1926	(14.00)	1.50	0.30	-	-	ヒノキ	

表5 扇出土遺跡一覧表(5)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格
山王遺跡 多賀前地区 文献89	1枚		SE1606	4層	10世紀前葉	217	(26.00)	2.00	0.30	斎串、土師器(坏・高台坏)、墨書土器「西曹司」、須恵器(坏・長頸壺)、赤焼土器(坏・皿・高台坏・高台皿)、墨書土器、灰釉陶器、瓦	土師器坏・高台坏の内面にヘラミガキ後黒色処理	モミ属	緑釉陶器、八花鏡、帯金具、銅鏡、石帯、漆紙文書、人形、馬形、立体蛇形、呪符、人面墨書土器などの出土。国司などの上級官人の館と推定。市川橋遺跡と一連の遺跡。
	1枚		SD172(SX10)東西大路北側溝	D期	9世紀前葉	218	(8.50)	2.50	0.30	土師器坏・壺、須恵器坏、墨書土器、緑釉陶器碗	土師器坏内面にヘラミガキ後黒色処理	スギ	
	(1枚)			D期	9世紀前葉	221	(18.00)	2.50	0.50			ヒノキ	
	1枚		SD173(SX10)東西大路北側溝	6期	10世紀中頃	219	(5.50)	1.70	0.30	土師器坏、須恵器坏、墨書土器、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗	土師器坏内面にヘラミガキ後黒色処理	サワラ	
	1枚		SD2000河川跡(南北大路に並行)	9層	9世紀中葉	220	(8.10)	(0.80)	0.20	土師器(坏・長頸壺・壺)、須恵器(坏・長頸壺・壺)、墨書土器、人面墨書土器、土師器坏1点内外面に油煙付着、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗	土師器坏の内面・長頸壺の内外面にヘラミガキ後黒色処理	ヒノキ	
	(1枚)		SK410東西大路下			222	(11.00)	(2.00)	0.40	土師器、須恵器、瓦、挽物(盤・椀)、曲物		ヒノキ	
	(1枚)		SD1740(柵に並行する溝)			223	(8.00)	(1.50)	0.30			モミ属	
大坪遺跡 第2次 文献41		1本	SG1河川跡。掘立柱建物跡群そばの投棄場D7グリッド	5-7層	9世紀後半	37-112	8.00	1.40	0.40	斎串、下駄、折敷、曲物、赤焼土器坏、土師器、須恵器、墨書土器、刀子	土師器(内黒)外面に墨書	-	自然地形に制約された立地条件で政治的目的をもった計画集落。
荒田目条 里遺跡 文献17	1枚		第3号溝跡(運河)		9世紀	124-2	27.10	2.80	0.20	曲物		ヒノキ	郡府木簡、種子札、人形、絵馬、人面墨書土器出土、土馬。磐城郡内の有力氏族が関係。
的場遺跡 文献79	2枚		湿地A	黒シミ砂層	8世紀前半~10世紀前半	208、209	(19.20)	1.50	0.40	斎串、櫛、舟形、箸形、糸巻、琴柱、權、編針、浮子100点、須恵器、土師器、赤彩土師器、管状土錘8,600点、大型有溝石錘、製塩土器、漆付着土器、墨書土器330点	赤彩土師器	-	漁業や漁獲物の製品化の管理。内水面を利用する流通の經由地。帯金具、太刀足金物、木沓出土。組織的に漁業を行う。
	1枚	210				(0.93)	1.20	0.40	-				
中倉遺跡 文献60	2枚		川跡	川の落ち際遺物集積区	9世紀後半	356	22.4	1.80	0.30	木筒、斎串、馬形、紡輪、木錘、盤、曲物、漆器、付木、土師器、須恵器、転用硯、製塩土器、墨書土器、土管・土錘	無台漆器盤	-	沼垂郡の物資の集積地点・起点
船戸桜田 遺跡2次 文献61	1枚		川跡	10~13層	9世紀後半~末	620	16.45	2.40	0.15	木筒、船形、馬形、斎串、漆器盤6点、盤63点以上、曲物、焼印14点(盤、蓋、曲物)、土師器、須恵器、墨書土器、転用硯、人面墨書小壺	漆器盤	-	請求文書出土。川の蛇行部に墨書土器や祭祀具が集中して出土。律令祭祀が行われていた。
	1枚	621				15.20	3.45	0.20	-				
曾根遺跡 I 文献72	2枚		61N9	砂丘端泥炭層	9~10世紀	6、7	16.30	3.30	0.20	下駄、曲物、柄杓、火鑽、箸状木製品、土師器、須恵器	黒色土器	-	文字の無い荷札出土。郡衙か港湾事務所・税関に類似の施設。
	1枚	8				27.50	3.10	0.10	-				
牛道遺跡 文献70	2枚		SE184	1層	9世紀末~10世紀初頭	43、44	(13.70)	1.40	0.10	蓋、曲物、火鑽棒、土師器(無台坏・壺・鍋)、黒色土器無台碗、墨書土器、タール・煤付着土器、須恵器(坏・壺)	黒色土器碗、漆器蓋	ヒノキ	北東2.5kmにある小丸山遺跡からは100点を超える墨書土器、緑釉陶器が出土。
田伏山崎 遺跡 文献76		1本	沢地区北自然流路SD1077蛇行部川底	1層	10世紀前葉~11世紀前葉	21	(14.90)	1.50	0.30	八花鏡、棒状木製品、土師器無台碗(漆付着)、須恵器瓶、腰帯石錘、墨書土器、墨書のある須恵器小壺	土師器無台碗(漆付着)	スギ	平安時代の祭祀を行う場。官人が祭祀に関わった。木筒、緑釉陶器、製塩土器出土。沢地区南S113周辺から6世紀後半の黒色処理の土師器が出土。
		1本	32L7	VIII c層	平安時代の遺物を含む包含層	26	(19.90)	1.80	0.20	緑釉陶器、黒色土器、製塩土器、二次焼成を受けた小型壺、火鑽皿	黒色土器	スギ	

表6 扇出土遺跡一覧表(6)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格
一之口遺跡東地区 文献69		1本	SD603河川 跡		平安時代 後期	66	(23.30)	2.60	0.60	下駄、曲物底板、土師器、黒色土 器	黒色土器 4点	スギ	「高有私印」銅印 が出土した江向遺 跡と平行する時期 に営まれ、何らか の関係があると推 定される遺跡。
		1本				67	(19.20)	2.10	0.40		スギ		
		1本	SD1' 河川 跡	2層	平安時代 11世紀	314	(18.20)	2.00	2.50	呪符、櫛、人形、刀形、舟形、ミ ニチュア櫛、斎串、杓子、弓、曲 物、コモツ子、漆器、桙、火鑽 板、火鑽棒、土師器、黒色土器、 タール・煤付着土器、須恵器、灰 釉陶器	黒色土器 碗13点 (内黒、 暗文)、 漆器皿3 点	スギ	
		1本				316	(37.40)	2.80	0.50		スギ		
		1本				356	(13.80)	1.80	0.40		スギ		
		2本	SD1' 河川 跡	5層	平安時代 11世紀	454、 455	31.20	1.70	0.30	舟形、物差、下駄、柄杓の柄、曲 物、火鑽棒、砧、コモツ子、漆 器、挽物、土師器、黒色土器、須 恵器	黒色土器 碗(内 黒、内外 黒、暗 文)5 点、漆器 皿3点	ヒノキ 属	
	3本	459、 460、 461				(27.40)	1.60	0.40	-				
西鴨地遺跡 文献35	1枚		自然流路 (河道)	VI層	8世紀中葉 ~10世紀 末	403	(23.6)	1.4	0.2	横櫛、土師器、須恵器、黒色土 器、緑釉陶器、製塩土器	黒色土器	ヒノキ	緑釉陶器、製塩土 器、帯金具出土。 官衙関連遺跡。
鴨部・川 田遺跡Ⅱ 文献21		4本束	SD1069		平安時代 末	2661	(19.4)	1.6	0.2~ 0.3	土師器	無	ヒノキ	-
鹿田遺跡 第1次調 査 文献20		1本	井戸24		平安時代 末	-	-	-	-	浮子、曲物		スギ	藤原氏殿下渡領の 鹿田庄か春日井神 社領の荒野宅。
		1本				-	-	-	-		スギ		
小倉畑遺跡 文献22	3枚(同 一)		溝状遺構	-	9~10世紀	469~ 471	30.30	3.30	0.30	横櫛、付け札状木製品(ササラ か)、曲物、土師器、黒色土器、 須恵器	黒色土器	カヤ	帖佐郷の中心地。
黒谷川宮 ノ前遺跡 文献56	1枚 未製品		SR1001南 北方向自 然流路	第7層	9~11世紀	1809	39.8	末幅4.9 基幅1.5	0.2~ 0.4	串形木製品、曲物、漆器、内外 赤彩土師器皿、土師質土師鍋、黒 色土器、製塩土器、墨書土器、青 磁	赤彩土師 器、黒色 土器、漆 器	ヒノキ	板野郡街想定地。 阿波国府と讃岐国 に向かう南海道要 衝の一つ。8から9 世紀は官衙、中世 は屋敷地。緑釉陶 器、円面硯、青 磁、製塩土器出 土。
	13枚束 閉じた 状態で 出土		SR1002東 西方向自 然流路	-		1979~ 1991	28.3	末幅3.8 基幅2.7	0.15	人形、齋串、串状木製品、赤彩土 師器坏	赤彩土師 器	ヒノキ	
史跡出雲 国府跡 大舎原地 区 文献48、 49		4本束 (墨痕 有)	4号井戸 (庇付掘立 柱建物1号 建物：国 司館に付 属する)	8層下 層(井 戸枠上 面を覆 う土)	11~12世 紀	29	(20.0)	1.2	0.2~ 0.4	箸、板状木製品、棒状木製品、須 恵器、曲物、土師器、白磁、丸 瓦、ガラス小玉	内面黒色 土師器、 漆膜(黒 に赤で書 文)	スギ	大舎原地区は国司 の館と考えられ、 堂田地区は東に隣 接する。遺跡の北 西に真名井神社が ある。木簡、緑釉 陶器、墨書土器、 円面硯、朝鮮半島 系陶磁器、擬漢式 鏡、ガラス小玉出 土。奈良時代末か ら瓦葺き建物が造 営された。玉造関 係、金属製品生産 関係遺物出土。
		1本				30	(15.9)	0.75	0.2		スギ		
		1本				31	(16.0)	0.8	0.2		スギ		
		1本				32	(15.3)	0.8	0.2		スギ		
史跡出雲 国府跡6 堂田地区 文献50	3枚	12号井戸		中層 (4・5 層)	平安時代 後半	22-1~ 3	(14.5)	1.4	0.5	箸状木製品、漆器、土師器皿、土 師器鍋、黄釉陶器、種子(モモ、 ヤマモモ、ウメ、オニグルミ)、 獣骨(イノシシ、シカ)	漆器	スギ	
	1枚					22-4	(6.9)	1.3	0.3			スギ	
	1本					22-5	(9.1)	0.7~0.9	0.2			-	
						22-6	(8.3)	1.0	0.3			-	
	1本												
観音寺遺跡 文献57~ 59	5枚(小 型)		7区SD1004	-	9~10世紀	2869	19.5	1.8	0.2	板状木製品、黒色土器、土師器	黒色土器	スギ	阿波国府内で廃棄 された堆積した自 然流路。勸籍木 簡、物忌札、銅 印、緑釉陶器、墨 書土器、銚子出 土。
	1枚		SR3001南 区(03-8)	V	8世紀後半 ~9世紀前 半	159	(6.5)	(1.7)	0.2	円筒状人形、剣形、紡織具形、木 札、斎串、下駄、曲物、棒状祭祀 具、桙状木器、部材、鋤、馬鋤、 土師器、黒色土器、墨書土器	黒色土器	-	
	3枚	212				(23.7)	1.7	0.3	-				
	3枚		SR3001南 区(04-2)	II	中世	601	(18.7)	(1.4)	0.2	人形、斎串、木札、箸、棒状祭祀 具、紡織具、曲物、土師器、黒色 土器、土鏝、動物遺体(イヌ)	黒色土器	-	
	2枚		SR3001南 区(05-1)	III	10世紀前 半~11世 紀初頭	757、 758	30.5	1.5	0.4	人形、鳥形、刀子形、剣形、斎 串、下駄、棒状祭祀具、榎、横 櫛、糸巻横木、杓子、箸、織機、 曲物、馬鋤、腰掛、台座、棒卷 棒、瓦、須恵器、土師器、黒色土 器、赤彩土師器碗、墨書土器、土 師器羽釜、土鏝、砥石、動物遺体 (ウマ、ウシ、イヌ)	赤彩土師 器碗、黒 色土器	-	
	1枚	759				(10.1)	(1.6)	0.2	-				
	1枚	760				(9.5)	1.7	0.3	-				
	1枚	761				(5.1)	1.5	0.2	-				
	1枚		SR3001南 区(05-1)	IV	9世紀後半 ~10世紀 前半	876	(24.0)	2.3	0.2	横櫛、斎串、人形、鳥形、刀子 形、木札、棒状祭祀具、箸、火付 棒、曲物、挽物、俎、籠、木鏝、 土師器、須恵器、墨書土器、土 鏝	無	-	
	1枚		SR3001南 区(05-1)	V	8世紀後半 ~9世紀前 半	924	31.7	4	0.4	横櫛、琴柱、人形、刀形、紡織具 形、鳥形、舟形、斎串、木札、柄 杓、杓子、箸、棒状祭祀具、曲 物、挽物、木鏝、紡織具、馬鋤、 柄、土師器、須恵器、墨書土器、 動物遺体(ウマ、ウシ、イヌ)	無	-	

表7 扇出土遺跡一覧表(7)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格
観音寺遺 跡文献58、 59	1枚		SR3001南 区(05-2)	Ⅲ	10世紀前 半~11世 紀初頭	1272	30.2	1.4	0.2	横櫛、人形、刀形、剣形、鐺形、 矛形、紡織具形、陽物形、木札、 下駄、斎串、棒状祭祀具、箸、籌 木、柄杓、杓子、匙、紡織具、留 針、曲物、槽、剝物、挽物、栓、 馬鐙、木錘、横槌、編棒、鐺、鳴 鏝、部材、板材、禱巻棒、土師 器、土錘、緑釉陶器、墨書土器 (人物画)、人面墨書土器、動物 遺体(ウマ、イヌ)	無	-	阿波国府内で廃棄 された堆積した自然 流路。動籬木 筒、物忌札、銅 印、緑釉陶器、墨 書土器、銚帯出 土。
	4枚					1273	27.4	1.2	0.1			-	
	3枚束					1274	35.2	1.7	0.3			-	
	1枚					1275	34.4	1.6	0.4			-	
	9枚まと まって 出土					1276	26.6	1.7	0.3			-	
	11枚束					1277	18.8	1.0	0.15			-	
	2枚					1278	18.6	1.3	0.4			-	
	4枚束					1279	35.0	1.7	0.3			-	
	4枚束					1280	(6.3)	1.2	0.2			-	
	3枚					1281	(9.7)	1.4	0.2~ 0.4			-	
	3枚					1282	(9.8)	(1.6)	0.2			-	
	1枚					1283	(15.7)	1.7	0.3			-	
	1枚					1284	(13.7)	1.3	0.2			-	
		1本				1285	(13.9)	(1.7)	0.6			ヒノキ	
	2枚束					1286	(9.6)	1.5	(1.5)			-	
	2枚					1287	(6.9)	1.4	0.2			-	
	2枚					1288	(9.5)	1.1	0.2			-	
	1枚					1289	(10.2)	1.8	0.3			-	
	1枚					1290	(7.1)	1.0	0.3			-	
	1枚		SR3001南 区(05-2)	Ⅳ	9世紀世 紀後半~10 世紀前半	1529	(20.2)	1.8	0.2	人形、馬形、刀形、紡織具形、棒 状祭祀具、斎串、天秤棒、木札、 箸、曲物、土師器、須恵器、黒色 土器、動物遺体(ウマ、ウシ、イ ヌ)	黒色土器	-	
1枚		SR3001南 区(04-1)	Ⅳ	9世紀世 紀後半~10 世紀前半	1955	(7.4)	1.2	0.3	横櫛、円筒状人形、剣形、刀子 形、矛形、戈形、鐺形、紡織具 形、斎串、下駄、箸、杓子、紡織 具、曲物、挽物、柄、榎、編台、 編棒、題籤軸、籌木、火付棒、墨 書土器、土錘、動物遺体(ウマ)	漆器椀 (外面黒 漆内面赤 漆)	-		
2枚束					1956	(32.0)	(2.5)	0.2			-		
1枚					1957	(27.1)	1.8	0.6			-		
1枚					1958	(10.2)	(1.7)	0.2			-		
6枚束					1959	(10.4)	(1.2)	0.2			-		
1枚		SR3001南 区(04-1)	Ⅴ	8世紀後半 ~9世紀前半	2177	(11.1)	(1.6)	0.3	横櫛、人形、馬形、舟形、刀子 形、刀形、紡織具形、斎串、棒状 祭祀具、琴柱、木札、曲物、挽 物、題籤軸、籌木、土師器、須恵 器、墨書土器、土錘、動物遺体 (ウマ、ウシ、イヌ)	内外面赤 彩土師器	ヒノキ		
1枚		SR3001南 区(07-1)	Ⅳ	9世紀世 紀後半~10 世紀前半	2448	(7.5)	1.1	0.3	横櫛、人形、斎串、棒状祭祀具、 曲物、土師器、須恵器、土錘、動 物遺体(ウマ)	内外面赤 彩土師器	-		
4枚束		2449	31.9	1.6	0.4	-							
1枚		SR3001南 区(07-1)	Ⅴ	8世紀後半 ~9世紀前半	2480	30.9	3.2	0.2	人形、剣形、斎串、木札、曲物、 木錘、禱巻棒、籌木、土師器、土 錘	無	-		
1枚		SR3001 3 区西	6	-	12	(10.8)	2.9	0.35	織機、曲物、土師器、黒色土器	黒色土器	-		
3枚		SR3001 3 区西	8	10世紀前 半	33	(23.0)	1.6	0.3	斎串、棒状祭祀具、箸、曲物、		-		
4枚表面 に墨痕					34	32.9	1.4	0.3			-		
1枚		SR3001 3 区西	9	10世紀前 半	51	(6.9)	1.45	0.25	斎串、棒状祭祀具、琴か、箸、曲 物、土師器		-		
1枚		SR3001 3 区北	7	10世紀後 半~11世 紀初頭	89	(8.0)	1.4	0.4	織機、曲物、土師器		-		
1枚		SR3001 3 区東	7	10世紀後 半~11世 紀初頭	123	(27.1)	1.3	0.4	人形、鳥形か、鐺形か、斎串、棒 状祭祀具、箸、曲物、織機、籌 木、火付棒、土師器、瓦		-		
1枚					124	(8.5)	1.7	0.35			-		
1枚		SR3001 3 区東	8	10世紀前 半	205	(3.2)	1.5	0.25	人形、刀形、舟形、斎串、棒状祭 祀具、箸、織機、横槌か、柄、編 棒、曲物、籌木、火付棒、土師 器、黒色土器	黒色土器	-		
	1本	SR3001 3 区東	12	9世紀代	400	27.6	1.5	0.5	人形、斎串、棒状祭祀具、横櫛、 箸、下駄、曲物、題籤軸、籌木、 火付棒、土師器、黒色土器、瓦	黒色土器	-		

表8 扇出土遺跡一覧表(8)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格	
柳之御所 跡第21・ 23・28・ 31・36・ 41次 文献12		1本	21SD1外郭 を区画する 大規模な 堀の東 南部分	集中 して 出土 する 箇所 2箇所	12世紀後 半代	563	(18.70)	0.90	0.30	立体人形、鑑形、陽物形、刀形、 笄形、五輪塔形、横櫛、鞘、刀子 柄、下駄、物差、曲物、折敷、 箸、漆刷毛、匙状木製品、杓子、 篋状木製品、糸巻、紡輪、御簾 鏝、編針、付札状木製品、櫛齒状 木製品、笹塔婆、火鑽板、かわら け、墨書土器	内面炭 素・炭化 物吸着か わらけ16 点	アス ナロ	祝府木簡、四耳 壺、白磁水注、梅 瓶、火舎、花瓶、 八稜鏡、円鏡、琥珀、水晶、ガラ ス、鉄鈴出土。寝 殿造の対の屋の絵 が描かれた折敷、 「人々給納日記」 が書かれた折敷出 土。11世紀末から 12世紀末の約100年 間にわたって奥羽 を支配した平泉藤 原氏に関連する遺 跡。12世紀後半代 の遺跡で、『吾妻 鏡』に記載された 「平泉館」（政 庁）に相当する可 能性がある。	
		1本					564	(7.20)	0.90			0.20		アス ナロ
		1本					565	(7.00)	1.80			0.30		スギ
		1本	23SD34			915	(7.60)	1.10	0.50	刀子柄、曲物、草履状木製品、か わらけ、白磁水注	内面煤付 着かわら け2点、 タール付 着かわら け4点	スギ		
		1本	41SD2外郭 を区画する 大規模な 堀の北 西部分。	溝に 架か つて いた橋 のそば から多 数出土	12世紀後 半代	1130	(19.10)	1.30	0.50	杵形、碇形、糸巻、刀子柄、篋状 木製品、下駄、曲物、折敷、杓 子、箸、羽子板状木製品、竹ト ンボ状木製品、独楽、笹塔婆、火鑽 臼、かわらけ、穿孔の有るかわら け	二次焼成 内面煤付 着2点、 タール付 着かわら け1点	スギ		
		3本バラ				1131~ 1133	23.10	1.50	0.50			スギ		
		2本束	21SE2	最下層	12世紀後 半代	1653	(21.00)	1.20	0.30	木簡、刀子柄、下駄、漆器、折 敷、土師器皿35点、胡桃・桃の 種、ウリ科種子、かわらけ、青磁 碗	漆器、 タール付 着土師器 皿1点	スギ		
		1本	28SE4	下層 21層		2356	(6.10)	2.10	0.30	人形、刀子柄、漆器、箸、曲物、 折敷、糸巻、笹塔婆、土師器皿 247点、人面墨書かわらけ、白 磁、ウリ科種子	漆器、内 面炭化物 付着かわ らけ2点	アス ナロ		
		1本	28SE5	4層	12世紀後 半代	2405	(7.10)	1.30	0.40	木簡、立体人形、横櫛、折敷、か わらけ、ウリ科種子、焼けた白 磁・青白磁	炭素付着 かわらけ 2点	スギ		
		6本バラ	28SE17	9層	12世紀後 半代	2807~ 2812	(23.80)	0.90	0.30	木簡、櫛齒状木製品、刀子柄、か わらけ、瓦、刀子	煤付着か わらけ1 点	竹		
	1本	21SK55	最下層		3519	26.10	1.00	0.30	扇状木製品、折敷、箸、曲物底 板、笹塔婆、かわらけ、ウリ科種 子		-			
	1本	23SK83便 所遺構	最下層	12世紀後 半代	3677	(26.80)	1.10	0.40	青白磁合子蓋、かわらけ、墨書土 器、チュウ木(多数)、ウリ科種 子、梅の種、鉄鈴		スギ			
柳之御所 遺跡50次 文献13		1本	50SE3	3層	12世紀	4006	(12.40)	1.70	0.40	墨書木片、印章、櫛、糸巻、もの さし、宝塔、曲物底、箸、方形曲 物、折敷、篋、刀子柄、下駄、か わらけ、漆布に覆われた白磁四耳 壺、白磁皿、常滑広口壺、渥美 壺、渥美片口鉢・壺・壺、漆塗り 用途不明木製品（底面両端に布付 着）	かわらけ 内面に油 煙付着。 漆塗り用 途不明木 製品。漆 布で覆わ れた白磁 四耳壺	-	「警前村印」銅 印、漆布で覆われ た白磁四耳壺完形 品出土。奥州藤原 氏に関連する居館 「平泉館」か。	
柳之御所 遺跡52次 文献14		1本	52SE8		12世紀	5054	25.00	1.00	3.00	木簡、刀形、横櫛、円盤状、漆 器、折敷、箱、曲物、杓子、櫛、 木槌、箸、刀子鞘、多数のかわ らけ、常滑（壺、片口鉢）、白磁 壺、緑釉、中国陶器壺、丸瓦、平 瓦	かわらけ 内面に油 煙付着が 少数有。	スギ		
		1本				5055	25.00	1.00	3.00	スギ				
		4本束				5050~ 5053	45.00	2.00	0.50	スギ				
柳之御所 遺跡55次 文献15		3本	55SE1		12世紀前半	-	-	-	-	かわらけ、木簡、漆器、鞘、箸	漆器			
柳之御所 遺跡56次 文献15		1本	56SD38居 館の外周 を巡る堀		12世紀	4047	(14.00)	1.30	0.50	かわらけ、白磁、青白磁、瓦、柱 状高台、壁土、下駄、鑑、箸		スギ		
志羅山遺 跡第84次 文献84		2本束	10号溝		12世紀	10	(17.20)	0.90	0.40	下駄、装飾用金具、三角形布製 品（烏帽子）	無	-	平泉の官庁街。高 い生活水準の空 間。『吾妻鏡』に ある「高屋」「倉 町」に相当か。白 磁水注、石製腰 帯、水晶、烏帽子 出土。	
志羅山遺 跡第14・ 25次 文献11		1本	SE5	15層	12世紀	21	24.50	1.00	0.40	漆器碗、下駄、折敷、曲物、箸 101点、羽子板状木製品、刀形、 土師器皿84点、青磁、白磁、炭化 物、金属製品、獣骨	漆器、 タール付 着土師器 皿6点	ヒノ キ属 類似 種		
志戸田縄 遺跡第3 次 文献42		2本	SD4 屋敷 区画溝		12世紀後 半代	52- 122、 123	(13.10)	1.60	4.20	下駄、漆刷毛、小刀鞘、須恵器、 土鈴、碇石、馬齒	無	スギ	屋敷跡	

表9 扇出土遺跡一覧表(9)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格	
山岸遺跡 文献77		1本	SD10		10世紀～ 12世紀後 半	72	(13.80)	1.70	0.40	杓子、糸巻、浮子、コモツチ、円 形板、楔、部材、漆付着須恵器坏		スギ	9世紀後半～10世紀 は製塩土器、漆バ レット、緑釉短頭 壺が出土。12世紀 末は木筒、白磁四 耳壺、青白磁梅瓶 出土が出土し名主 クラスが存在す る。13世紀中頃は 沼河郷(保)の地 頭名越氏(北条氏 一門)に関連した 遺跡。13世紀末に は名越氏の別宅あ るいは接客の場 (庭園を持つ建物 が建つ)も兼ねた 北陸経営の拠点。	
		1本				1	89	(16.50)	1.60			1.40		
		8本	SR3194	2b	9～10世紀	170～ 177	(24.60)	1.60	0.50	斎串、荷札状木製品、刀子形、杓 子、曲物、浮子、黒色土器、製塩 土器、須恵器、灰釉陶器	黒色土器	スギ		
		3本束	SR512	6	12世紀後半	285	(19.50)	1.60	0.60	横櫛、木筒状木製品、斎串、箸、 糸巻、コモツチ、チキリ、円形 板、方形板、槽、火鑽棒、土師質 皿、白磁、珠洲壺・甕		スギ		
		1本				287	24.20	1.20	0.50			スギ		
		1本	SD3495	1	13世紀末	405	(16.40)	2.00	0.40	-		-		
		3本	SE4404	4	13世紀	436～ 438	(9.10)	2.10	0.30	箸、草履芯		-		
		1本	12R3	Ⅲe	12世紀後半	1059	14.20	1.70	0.20	呪符、舟形代、杓子、ヒョウタ ン、糸巻、浮子、コモツチ、円形 板		-		
		1本	13S15	Ⅲe	12世紀後半	1060	7.50	2.50	0.80			-		
		1枚	13P21	Ⅳa'		1082	(17.30)	2.60	0.60	木筒、漆器、箸、円形板、コモツ チ	漆器	スギ		
		1本	13S7	Ⅲe～d	12世紀後半	1083	24.20	1.20	0.20			-		
		1本	16E16	Ⅲa		1197	(12.90)	1.80	0.50	斎串、漆器、鞘、円形板、多角形 板	漆器	-		
	1本				1198	(18.10)	1.80	0.60			-			
寺前遺跡 文献75		3本束	SB302-P12		12世紀後 半～13世 紀代	77	(18.90)	1.10	0.40	箸、漆器皿	漆器	スギ	陸路および水上交 通の中継地点。古 代には官道が通過 する中世において も重要な位置をし める。在有力者が 街道沿いに屋敷 を構え、鑄物、漆 器等の生産と販売 流通という経済活 動を行う。蘇民将 来木筒出土。国衙 領。	
		3本束	道状遺構		12世紀後半	401	36.60	2.00	1.60	箸、漆器、紡錘車、折敷	漆器	スギ		
		3枚	13B、14C23		12世紀後半	515～ 517	(21.30)	2.10	0.40	人形、動物形、刀形、杓子、漆 器、箸、下駄、折敷、紡錘車	漆器	スギ		
		3枚	A2区 P1		12世紀後半	586～ 588	(16.40)	1.90	0.40	挽物粗型、挽物椀底部か		スギ		
		1枚	出土位置不明			903	(12.30)	1.80	0.10			スギ		
		1本	11C11周辺	三		1007	(15.10)	1.00	0.30	折敷		針		
		1枚	不明			1188	(11.00)	1.10	0.50			針		
	4本束	11C24			1189	33.60	1.40	0.30	漆器	漆器	スギ			
水走遺跡 第3次 文献40		7本束	No10、11 ビット溝1	第10 層上 面	鎌倉時代 末期(13世 紀後葉)	400	17.60	1.40	0.15	下駄、曲物底板、板状木製品、 杭、土師器大皿、ウマの歯、桃の 種		不 へ こ ま たは ヒ ノ キ	-	
小坂居付 遺跡 文献78		1本	SD112屋敷 地区画溝	8	13世紀後半	57	22.20	2.20	0.30	斎串、篋、草履芯、箸状木製品、 曲物、有孔円板、刀子、折敷		スギ	屋敷地。刀子の 柄・鞘を生産し、 柄に唐木の紫檀を 使用。紀年銘のある 芽札、米の品種 を書いた種子札、 呪符、漆器出土。	
子安遺跡 文献51		1本	SE20807	底面	中世後期	1683	22.00	0.80	0.20	漆器椀、折敷、曲物、杓	漆器	-	中世後期の区画溝 を有する屋敷地。	
大師東丹 保遺跡 Ⅱ・Ⅲ区 文献91		6本束	包含層 SD上層 B-38	Ⅱ区 第1 面	13世紀中 葉～14世 紀初	176	35.60	1.20	0.60	呪符木筒、斎串、人形、刀形、陽 物形、手鏡形木製品、横櫛、下 駄、草履芯、漆器椀・皿・曲物、 折敷、曲物、箸、板杓子、糸巻、 手押木、木錘、網代、青磁、白磁 四耳壺、土師器皿、鍋	土師器皿 内外面煤 付着	ヒノキ	屋敷に附属する祭 祀場。雨止祈願呪 符、馬下顎出土。	
砂山中道 下遺跡 文献73		1本束の 内の3本 が残 存。閉 じて要 を上に した状 態で出 土	SE17(集 落の中心 の掘立柱 建物SB3に 付属する 井戸)	6	鎌倉～室 町(14世 紀)	21	33.50	2.50	0.30	箸状木製品、棒状木製品、漆器 椀、織機?、中世土師器、珠洲播 鉢、甕類片、土錘、鍬、礫点、炭 化米	漆器椀1 点	ヒノ キ科	東大寺領加地荘に 関係した在地有力 者の住まい。火葬 跡から漆器皿と人 骨出土。呪符木 筒、卒塔婆など16 点の木筒出土。	
姫御前遺 跡Ⅰ 文献74		1本	4A8	Ⅱb	14世紀後 半	216	(16.10)	1.50	0.30	木筒、人形、刀形、下駄、箸状木 製品、棒状木製品、銭貨		スギ	湿地的な環境で祭 祀が行われた。茶 の湯や香を嗜むこ とのできる比較的 財力のある階層。	

表10 扇出土遺跡一覧表(10)

遺跡名 文献番号	檜扇	扇子	出土 遺構	出土 位置	扇出土 遺構の時期	掲載 番号	扇骨長 (cm)	扇骨幅 (cm)	扇骨1 本の厚 (cm)	扇以外の出土遺物	黒色・赤 色土器・ 木器の有 無	扇樹種	遺跡の性格
千葉地東 遺跡 文献23		7本束	22号溝		13世紀中 頃～14世 紀初	9	35.30	1.40	0.35	青白磁梅瓶、土師器皿、花文漆器 碗・皿、刀子柄、石鍋、銅銭	漆器	-	古代役所推定地
		1本 団扇力	南西側河川	麻植土層		29	(18.40)	2.20	0.70	横櫛、竪櫛、杓子、へら状木製 品、花文漆器碗・皿、将棋駒、青 磁、白磁四耳壺、山茶碗、土師器 皿、刀子、古銭、骨製筭	漆器	-	
		3本	南西側河川	麻植土層		33	26.30	1.20	0.40	青磁、白磁、青白磁(梅瓶、合 子、水注)、二彩盤、緑釉、土師 器皿、横櫛、竪櫛、陽物、花文漆 器碗・皿、下駄、板草履、曲物、 陽物、土製紡錘車、土製円盤、埴 塙、骨製筭、石鍋、刀子、銅銭	漆器	-	
		3本	北東側河川	3砂層		220	(17.10)	1.60	0.30	青磁、青白磁合子、緑釉、四耳 壺、山茶碗、火鉢、土鍋、石鍋、 瓦器、土師器皿、墨書土器、瓦、 土製円盤、土錘、羽口、漆器、横 櫛、下駄、卒塔婆、呪符、陽物、 独楽、付札、刀形、火鑽板、小 刀、刀子、紡錘車、銅銭	無	-	
		1本	南西側河川	覆土		254	(16.30)	1.20	0.30	青磁、白磁四耳壺、土師器皿、土 師器皿墨書、舟形木製品、木札、 有孔土製円盤、土錘、骨製筭、刀 子、銅銭	無	-	
		1本	北東側河川	4砂 層上 部		69	(15.20)	0.90	0.30	青磁、白磁四耳壺、土師器皿、土 師器皿墨書、舟形木製品、木札、 有孔土製円盤、土錘、骨製筭、刀 子、銅銭		-	
		4本束	包含層	第5層		223	35.40	1.80	0.60	下駄、横串		-	
		5本束	包含層	第7層		71	(20.60)	1.50	0.40	横櫛		-	
	5本束	側溝		96	25.20	1.00	0.60	横櫛、陽物、下駄、刀形代		-			
草戸千軒 町遺跡Ⅱ 文献83		1本	SD1375		13世紀	559	(16.40)	2.00	0.40	人形、鼻縁、箸状木製品、担架 状・格子状建築部材、円形板、折 敷、漆器、曲物、下駄、草履、木 槌、火鑽棒		-	流通・商取引関連 施設。呪符木簡 (不動明王と五字 文珠、五大菩薩)、 天罡呪符、 天形星符、「大般 若経転読」とある 大般若経転読礼、 「南无阿弥陀佛」 と記した柿経など 出土。井戸、溝か ら室町時代の鏡4 点出土。
		1本	SD3190	最下 層	13世紀後半	742	(19.50)	2.00	0.30	付札木簡、舟形、独楽、箸状木製 品、杓子状木製品、円形板、箱側 板、青白磁、折敷、漆器、曲物、 横櫛、下駄、草履状木製品、柄、 へら	漆器 (蓋、 椀)	-	
		2本束			743	38.20	1.50	0.30	付札木簡、棗、人形、横櫛、鞘、 箸状木製品、折敷、円形板、杓子 状木製品、曲物、栓、漆器、下 駄、草履状木製品、鞘、へら、土 師質土器碗、備前・常滑・亀山 壺、東播系須恵器播鉢、青磁・白 磁、骨角製養子・針、石鍋、筭	漆器	-		
		1本	SE3275		13世紀	758	(30.70)	1.50	0.40	人形、舟形、刀形、陽物、棗杖、 棗、箸状木製品、羽子板状木製 品、板塔婆、榎、籠、円形板、曲 物、桶側板、漆器、折敷、杓子状 木製品下駄、草履状木製品、へ ら、編具	漆器	-	
		7本束	SG2740	下層	14世紀	693	37.90	2.00	0.30	紀年銘墨書木札、人形、舟形、陽 物、棗、箸状木製品、杓子状木製 品、柱状塔婆、板塔婆、五輪塔、 宝篋印塔、折敷、曲物、蓋板、箱 側板、桶側板、栓、円形板、筭、 下駄、草履状木製品、榎、柄、 鞘、へら、中国製陶磁器、朝鮮産 磁器碗、土師質土器、砥石、イ ヌ・ウシ・ウマの骨	漆器 (椀、 皿、片口 鉢)	-	
		6本束	SG3060		14世紀	726	35.50	1.60	0.40	木筒(多宝塔及び地藏菩薩等、南 無阿弥陀佛、南無大日如来、柿 経)の中に箸、陽物形、刀形、箸(人 骨の中に箸)、卒塔婆、下駄、杓 子、漆器(椀・皿・片口鉢)、曲 物、蓋、折敷、箱、火鑽臼、草履 芯、刀子鞘、土師器質皿、骨 (人・犬)	漆器	スギ	
浦廻遺跡 文献71		8本束	4C14	VIIIy	13世紀後半～14世紀前半	58	32.90	1.70	0.2～ 0.6	紀年銘卒塔婆、柿経、羽子板状木 製品、木胎漆器椀、折敷、桶、 箸、籠、陶磁器(瀬戸美濃、常 滑、信楽、楽、丹波、備前、唐 津、朝鮮、中国産)、天目茶碗、 花瓶、香炉、瓦、壁土、鑄型、金 属製品、土師器皿(墨書、穿孔、 刻書)、土師器鍋・釜、人骨、刀 子、古銭、硯、基石、数珠	土師器皿 にタール 付着、漆 器椀(黒、 赤)	-	城下町内部の川港 と祭祀空間。卒塔 婆、柿経(「妙法 蓮華経」「金剛般 若経」)。木製形 代の龍頭上半部に 黒と赤の彩色あり。

※扇：檜扇と扇子の両方を含む。宮都からは多数出土しており、今回はそれ以外の遺跡を中心に集成している。

※要が残存しているものを束とした。

表13 井戸出土まなこ一覧表(1)

遺跡名 文献番号	遺構名	遺構の時期	まなこ	その他遺物	黒色・赤色 土器・木器	打欠	まなこ出土状況等	遺跡の性格
興福地遺跡 文献27	SE3	鎌倉時代初	小型片口壺 (美濃須衛産)	山茶碗・皿、美濃須衛産、土師器皿、伊勢型鍋、白磁碗、扇子	白と黒の セット山茶 碗	有	片口の横を内面側から故意に打ち欠いている。埋井祭に使用した道具とともに、井戸上層にまとめて捨てられる。	荘園関連施設か
榎原遺跡 文献62	第三号井戸 第十二号井戸	奈良時代 奈良時代	曲物				井戸底から出土。 井戸底から出土。	
嶋上郡衛跡 文献55	井戸	平安時代中頃	二枚の合わせ口土師質皿（「天竺大神王」「十二神王」の墨書有）	斎串、横櫛、曲物、桃核、黒色土器、灯明皿、羽釜、土釜、緑釉陶器、灰釉陶器、マツカサ、モモの種子、ドングリ・ヒョウタンの実	黒色土器A2点、B8点、灯明皿7点		井戸底から出土。	嶋上郡衛
中畑遺跡Ⅱ 文献45	SE4	8世紀末（埋め戻し）	須恵器双耳壺	斎串、椀扇か短冊形薄板、土師器高坏脚筒部に細い角棒を挿入したもの、ヒョウタンに先の焦げた燃えさし状の棒を差し込んだもの、杖状木製品、土師器高坏脚筒部、墨書土器、ガラス埴塼	10世紀中頃に浅い窪地になった井戸枠に黒色土師器杯が入られる。	有	井戸中位に横位で出土。口縁部を打ち欠く。	栗太郡衛関連遺跡。ガラスの埴塼出土、官営工房的施設の存在が推定される。
	SE6	7世紀中頃	須恵器広口壺	土師器壺、須恵器高坏	無	有	底面から20cm上で横位で出土。口縁部を打ち欠いている。	
矢倉口遺跡 文献43	SE06	8世紀後半～10世紀中葉	完形須恵器壺1個体	皇朝十二銭（和銅開珮1枚、萬年通宝6枚、神功開宝14枚）。井戸中位から土師器杯120枚以上、黒色土器碗、箸、曲物、桃種子。	黒色土器（10世紀代）	無	V層最下層、井戸底部中央から、完形の須恵器壺1個体とともに壺下層より皇朝十二銭が20枚敷き詰められたように出土。	大規模な倉庫群の検出。木沓、尺、椀扇、墨書土器、円面硯、緑釉陶器出土。東海道の要衝に所在する、規格性をもつ官衛的遺跡群。
寺家遺跡 文献8～10	SE02	9世紀末～11世紀前半	井戸枠と同一形態	隆平永宝1枚、斎串1枚、円盤形木製品、ヒョウタン1個体分、墨書土器			井戸枠と同一形態で井戸底にある。	気多神社政庁。
戸水大西遺跡Ⅰ 文献26	SE02	9世紀前葉	須恵器双耳瓶、肩衛壺	井戸廃棄時に須恵器坏の中に小瓶が置かれる。堀方から斎串出土	無	無	井戸底から須恵器双耳瓶1点と肩衛壺1点が横向きに出土。井戸構築時の鎮納。	溝で区画された官衛的遺跡。紀年名木簡、人形、馬形、舟形、「宿家」「大市」など施設を示す墨書土器、漆器、石帯、瓦、鈿出土。
戸水G遺跡 文献31	SE1111（大型横板組井戸）	9世紀末～10世紀初	須恵器双耳瓶	椀扇、柄杓、曲物、木皿、箸状木製品、須恵器、土師器	無	有	井戸底に埋納。口縁部を打ち欠く。	港湾施設的性格の強い遺跡。
山王遺跡 多賀前地区 文献89	SE50	10世紀前葉	土師器短頸壺	土師器（坏5点、高坏1点）、赤焼土器（坏1点）、灰釉陶器、緑釉陶器	土師器短頸壺、土師器坏にヘラミガキ後黒色処理		不明	推定、国守の館
上野遺跡 文献92	SE01	11世紀前後	灰釉陶器長頸壺	土師器皿、土師器壺、灰釉陶器、「實平」墨書土器、土錘、土製支脚、砥石、瓦、鉄製品	無	有	頸部を打ち欠き井戸底から出土。	人名の墨書土器出土。
柳之御所遺跡 50次 文献13	50SE3	12世紀	白磁四耳壺	墨書木片、印章、扇子、櫛、糸巻、ものさし、宝塔、曲物底、箸、方形曲物、折敷、篋、刀子柄、下駄、土師器皿、白磁皿、常滑広口壺、瀝美壺、瀝美片口鉢・壺・甕	漆布で覆われた白磁四耳壺		井戸底から出土。	推定、平泉館
志羅山遺跡 文献11	1号井戸	12世紀	白磁水柱（完形）、柄杓（曲物部）	櫛、漆器、握柄状木製品、土師器皿、瓦、桃の種、栗、クルミ	漆器	無	注口が下で口縁部が南西側、杓は裏返して曲物部が北東側と対称の位置で出土。井戸鎮めに埋納されている。	平泉の官庁街。高い生活水準の空間。「吾妻鏡」にある「高屋」「倉町」に相当か。白磁水注、石製腰帯、水晶、烏帽子出土。

表14 井戸出土まなこ一覧表(2)

遺跡名 文献番号	遺構名	遺構の時期	まなこ	その他遺物	黒色・赤色 土器・木器	打欠	まなこ出土状況等	遺跡の性格
桜町遺跡 文献4、6	SE01	13世紀前半	水瓶（珠洲産）	多量のトチの実、連函下駄、箸状木製品、龍泉窯系青磁碗、白磁、下駄、杓子、曲物、漆器碗、骨片、中世土師器皿6点・碗5点、珠洲鉢3点、甕破片	珠洲鉢内面に煤付着1点	有	井戸底中央に正位で据えられている。口縁部と注口部を故意に打ち欠き、注口部には箸状木製品が詰め込まれている。	在地領主層の住居（館）
大町・縄手遺跡 文献5、6	SE01	13世紀前半	水注（珠洲産）	トチの実、箸状木製品		有	口縁部と注口部を打ち欠き横位に納置されている。注口に箸状木製品が差し込まれている。	崇徳院御影堂領大屋庄穴水保に係る中世開発領主の館跡。水陸交通上の要所に立地した集落。
御館遺跡 文献6	SE02	13世紀前半	小型壺（珠洲産）	柄杓、漆皿、折敷、曲物底板、箸状木製品、不明木製品、中世土師器20点	内外面に黒色漆のある漆皿1点	有	口縁部を打ち欠いている。井戸東側から出土。	御館遺跡から「大般若経転読」の墨書。
美麻奈比古神社前遺跡 文献4、5、6	SE01	13世紀前半	蓋付柄杓（曲物、柄なし）	人頭大の石2個、中世土師器7点、青磁、箸状木製品、トチの実、クルミの種子	無		井戸底に据えられ、左右に人頭大の石あり。	
上ノ垣外遺跡 文献88	SE42	13世紀初	二つ合わせた山茶碗	櫛、「承元」年十二月十日の線刻の有る栴、完形山茶碗、伊勢型鍋、川原石（50cm深で5個、70cm深で7個）	有	無	伊勢型鍋の中に入れて井戸中位から出土。	東寺領川合・大國荘の施設に関連する可能性あり。
草山遺跡 文献87	SE140	鎌倉末～室町	伊勢型鍋			有	底を打ち欠いた鍋の上に曲物があり、それを固定するように三方に石が置かれる。	集落跡。

※まなこ：甕や壺が精霊や神、または棲家や依り代として崇敬される習俗がインドにみられる（松村武雄1930「井戸の考古学」より）。壺や瓶、甕がほぼ完形の形であるもの。口縁部が故意に打ち欠かかれているもの。

岐阜県文化財保護センター

研 究 紀 要

第 1 号

2015年6月30日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東 1-26-1